



中国都市における服飾の認識に関するアンケート調査・分析

—天津を事例として—

夏目晶子¹

はじめに

2005年初めから今日まで、筆者は主に20世紀の中国衣生活の変遷と中国社会思想との関わりをテーマとして研究をしている。2006年2月から翌2007年1月にかけての天津での現地調査は、このテーマについての研究の一環として重要な役割を持っており、博士論文の一つの柱となるものである。

調査の対象としてこの地域を選択したのには、筆者が南開大学で一年間の留学生生活を送ったという外的要因もあるが、さらに大きな理由としてこの地域に存在する二つの特質が挙げられる。それは、天津が東部沿海地域の北方に位置する大都市として経済的に発展している一方で、首都北京に隣接する都市として古き伝統文化・風習を未だに色濃く残しているという点である。北京の海の玄関と言われる天津は、新・旧両面の特質を持っているのである。

それは衣生活・文化の面においても例外ではなく、「新」と「旧」、「現代」と「伝統」の要素が色濃く残っている。開放を求める一面がある一方で、伝統を守る一面も存在する。この両面性は天津の民間風俗の特性であり、とりわけ筆者は、こうした天津における特有の文化や民風に惹かれて、考察に当たっての調査地としたのである。

20世紀の中国社会は激しい変動の時期であった。清朝末期の混乱とその滅亡、中華民国の樹立、そして中華人民共和国建国

といった社会構造の大きな変革がこの約百年の間に起きた。その社会構造の変動は人々の生活のあらゆる面に影響を及ぼし、変化を起こしたが、それは、衣生活においてもさまざまな変化を起こしてきた。その変化の要因として、社会思想から受けた影響も服飾専門家らなどからしばしば指摘されてきている²。

しかし、その社会思想がどのように衣生活の変化に影響をもたらしたかという経緯、また、社会思想と衣生活との二者の間の密接な関わりなどについては、これまで深く掘り下げられることはなかった。20世紀の中国社会の変化は、もっぱら政治や経済などを中心として注目されてきており、この百年間の衣生活に起きた変化について、とりわけ社会思想と衣生活との関係を中国一般市民たちがどのように理解・認識しているのかという問題は取り残されたままになっている。近年においても、中国人の衣生活に対する意識・態度の実態把握については、研究が全くなされていないと言っても過言ではない。このことについて、更に見直す必要があると思う所以である。

本稿では、主にアンケートの現地調査の研究方法を採用して、天津地域を中心に、特に南開区、河西区を事例として、またその周辺地域などでの調査を加えて、総合的分析によって、天津を代表とする一般的な中国人の衣生活に対する意識・態度と、その社会思想との関わりに対する認識の実態

を明らかにしたい。

I 天津市の概況および衣生活形態の特色

1 天津市の概況

天津市は中国首都北京に最も近隣する直轄市で、中国北部の東寄り、華北平原の東北部に位置している。東南は渤海湾に臨み、西北は北京市と隣接しており、その他は河北省と接している。天津市の総面積は約11,000平方キロメートル、2005年の数字データによると、総人口は938万人、非農業人口は560.2万人で総人口の約60%を占めている。農業人口は377.8万人で総人口の約40%である。主な民族は漢民族であり天津市総人口の98%を占める。そのほか、回族、満州族、モンゴル族、壮族、朝鮮族などの少数民族も住んでいる。天津市は15の区、県を管轄している。

そのうち市に所属する区は和平、河東、河西、南開、河北、紅橋、塘沽、漢沽、大港、東麗、西青、津南、北辰、武清、宝坻である。また、市に所属する県は3つで、寧河、靜海、薊県³である。

天津は隋朝の時代に大運河が開通することによって形成された。唐代半ば以後、天津は南方の食糧や絹織物を北方へ運送する水陸の港町になった。宋朝、金朝ではこの地を“直沽賽”と呼んでいた。元朝に入ってから“海津鎮”へと改称し、軍事重鎮と水路の食糧運送の中心となった。明永楽2年(1404年)、城壁を築き、衛を設けたため、“天津衛”と呼ぶようになった。1928年、天津は特別の市に変わり、以来“天津市”となった⁴。

天津は中国の北方地方の交通の要であり、華北と東北を結ぶ交通の要衝である。1860年イギリス、フランス連合軍に侵略され、1900年に半植民地となり、やむなく九カ国の租界を開設した。当時、中国で設立した外国租界のもっとも多い都市とされた。それまでの天津の経済機能は、主に食糧などを大運河で北方に運送する漕運と、製塩工業を中心として五百年あまり続いて

きた。しかし、第二次アヘン戦争で敗れてから、やむなく貿易都市として開放した。各帝国主義列強が天津で工業を開設し、イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、日本、イタリア、オーストラリアなどの国々は自分の租界地内でいくつかの紡績、機械、化工などの企業、また、銀行を建てた。西洋人によって教会、病院や学校も設けられ、文化、芸術もそれに伴って天津に入ってきた。これらの外国資本主義の侵入によって、天津社会に経済、政治、文化、軍事面で大きな変化がもたらされた。当時、国内の官僚や外国人の仲介人たちも、次第に近代工業に投資するようになり、民族資本とされる中小企業も相次いで建てられた。第一次世界大戦の直前までに、全市で工場は70あまりに至った。西洋の科学技術や文化を習うことにおいても、全国の先頭に立っていた。洋務運動の時期、洋務派は学校や企業などを含めて、都市建設や管理において西洋を模倣していた。北洋軍閥の発祥地である天津で、新軍の新政を運営するにあたって、その新軍の軍事制度も全面的に西洋軍事を模倣した。そして、教育、新聞などの事業面においても創立、創刊は比較的早かった。北洋大学堂(1895年)、南開大学(1907年)、天津図書館(1908年)、『大公報』(1902年)など、その勢いは上海などのようにずば抜けて潮流に乗ってはいないにしても、時代の足取りにぴったりついていった。清朝末期の天津は、全国に注目される都市の一つであった。また、天津は一貫して名士が集まる地域でもあった。清朝最後の皇帝溥儀、民国の大統領袁世凱、黎元洪、馮国章、徐世昌および梁啓超、吉鴻昌など名士の旧居があり、孫文や李大釗、劉少奇、周恩来など革命先駆が天津で活動した、その記念館や住まいもまだ残っている。

民国時代になってから、“五四”運動によって、中国社会全体は「新」と「旧」、「興」と「滅」の転換期が訪れた。天津の経済、政治、教育、文化、思想などの面はこれまでにない発展の段階を迎えた。特に1937年の日中戦争直前までに、天津の民族工業は黄金の時期を迎え、紡績、軽工業、食

品、機械、加工などの工業企業は数千軒までに及んだ。天津の経済、商業、貿易は迅速に発展の方向へ進み、中国北方の経済中心と、中国と西欧との文化交流の中心になった⁵。天津港は中国北方の最大の総合貿易港、北方地方で最も重要な輸出港になった。この時期は商業が繁栄し、租界地が盛んになった時期で、人々にとって天津は憧れの地であった。

1949年に新中国（中華人民共和国）が建国されてからの二十数年間、全国は革命と闘争に明け暮れた。新中国の社会主義と旧中国の資本主義が戦い、新中国のプロレタリアと旧中国のブルジョアが戦い、特に文化大革命の間には、さらにプロレタリア的な幸福感が熱く提唱され、個人主義的な要素は激しく排除された。その中で、天津社会も物質的な生活においても精神的な生活においても、中国全体につれて極端な方向へ向かって発展していった。そして、20世紀70年代後半に入って、新中国は改革・開放をめざし、それとともに天津は現代の経済構造や文化構造に向かうことになった。改革・開放政策によって中国は、計画経済から社会主義型の市場経済へと移り変わった。80年代、天津では海河下流区と沿海地区を重点に開発が進められ、主に四つ（軍糧城、楊柳青、南河、咸水沽）の衛星工業都市とその他の工業地帯を發展させた。さらに続いて90年代初め、天津経済技術開発区と天津港保税區が建てられた。今、天津は中国北部で最大の沿海の開放都市であるだけでなく、中国経済、政治に影響を与える重要な都市として位置づけられている。その特有の地理的条件と歴史的条件が国家から重視され、支持されて、天津市は2006年に国家環境保護模範都市として認定された。

2 天津の衣生活形態の特色

天津は古くから服飾商業地として有名な地域であった。もっとも有名なのは明朝末期から建てられた天津市の最初の商業地“大胡同”通りで、別名“估衣街”と呼ばれていた（現在もそう呼ばれている）。その名の

通り、主に衣服類を扱っているところである。特に清末ごろ、主に絹織物や綿布、芝居用衣裳、衣服などの衣類店がこの通りに所狭しと並んでいた。衣服と絹織物の品数も豊富で、特に裕福な家庭はそこまで足を運び、布地や装飾品を購入した。また質屋は、衣服の売買などの目的で利用した。このため、估衣街は市民の衣生活の中心地として位置づけられていた。同時に、当時の北部地方の衣類などの紡績品市場の中心地としても有名であった。その地位は現在においても、北部地方でその存在を無視することができない。清朝の時代から受け継いだ各衣服店も、依然として市民に愛用されている。また、植民地時代に天津の繁華街の一角に置かれていた、およそ80年の歴史を持つ天津勸業場商厦もある。当時、この商厦の周辺にはたくさんの衣服の店があり、今現在も市民が愛用しているのである。このほか、濱江道など一般に若者向けの繁華街には有名ブランドの衣服専門店、若者向けのファッションショップ、輸入ファッション小売店などがずらりと並んでおり、衣服の種類も色とりどりである。20世紀のファッションといえば、これまではずっと上海が中国服飾の中心地で、特に女性の衣服が最新ファッションとして話題になってきた。衣生活面において天津は、この上海に対して、北方の服飾の中心都市として、中国の中で比較的早期に新思潮の衣服を受け入れた地域だといえる。では、二十世紀天津市民の衣生活はどうだったのか、手元の服飾資料を中心に検討し情報を提供したい。

植民地になる前まで、天津の人々は衣生活において、主に清王朝の服飾階級制度に基づいた衣服を着用していた。衣服の様式、色彩、文様、材質などは細かく身分によって区分され、規制されていた。その特徴は、一般的な衣服の様式としては、男性は満州族の長袍馬褂をまとい、女性は満州族の旗袍をまとった。漢民族の女性は自らの民族服を着用することが許されていたために、上衣と下裙であった。下層階級の男女は、主に粗布の中国式の上着、ズボンというス

スタイルであった。全体として中国式の伝統衣服の様式であった。

清朝末期、列強の侵入にともなって西洋文化、科学技術、教育、西洋の思想観念などが押し寄せ、中国人の衣生活に著しい変化が起きた。当時、中国の伝統衣服のほかに、西洋的要素の衣服や装身具が社会に現われ始めた⁶。清末、西洋人や西洋文化に伴って洋服も天津に入ったが、当初、中国人の間では洋服を着る人は少なかった。洋服を着るのは、主に西洋人を相手にする人や、外国商人相手の中国人仲介人、留学から帰国した中国人であった。しかし、次第に洋服を真似て着る中国人は多くなってゆき、辛亥革命の前までには、洋服を着ることは既に風習の一つになっていた。また、中国で初めて近代西洋要素の軍服を取り入れたのもこの天津地域である。1895年、新軍が天津で作られてから、袁世凱らの担当責任者は西洋先進の武器装備をとり入れ、また軍人の素質を重視するようになったと同時に、軍服の改革にも力を入れた。1905年に新軍の軍服が統一されるまで、天津地域の新軍は主に日本軍服の様式を採用していた。この影響を受けて、さらに沿海地方や海外華人の間には、清王朝が滅亡するまでの『髪を切る、衣服を改める』という運動が高まった。このような状況の中で、天津市民の衣生活は大きく変化した。伝統様式のほかに、西洋文化への憧れの影響で、西洋様式または中洋折衷様式の衣服も現れ始めた。

清朝末期、天津の一般市民や農民は、衣生活において、主に実用性を求めて材質の低い綿など粗布の伝統衣服（男性は長袍馬褂と、各種の上着）とズボンとの合わせの仕事着などを着ていた。女性は民族により異なり、漢民族の女性は主に上着とスカートを着用し、満州族の女性は主に旗袍を着用していた。衣服の文様も一般に、自ら刺繍した邪気駆除、福祿喜寿などの吉祥伝統文様が多く使われていた。さらに、知識人や工商で仕事している中層階級の衣生活の場合は、彼らの活動場は主に中心部や租界地に集中しているため、衣生活においても

変化を余儀なくされた。男性は主に背広やネクタイ、皮靴のほか、こだわりのある人はさらに礼帽や懐中時計、文明杖を身につけていた。女性の一部も、洋服を着用した。その特徴を挙げると、上着は体にフィットするデザインで、下のスカートはややゆったりして、全体として女性の体の曲線を強調していた。特に、若い女性の衣服のデザインは、四肢が露出し始めた。洋服を着用する女性の職種としては、主に外国の工商業や教会関係で仕事する人やその家族、或いは文化教育を受けた人やその家族であった。

当時、洋服の生産はまだ充分とはいえない状況であったので、その値段は極めて高かった。そのため、もう一種類の衣服が考案された。すなわち伝統様式と西洋様式が融合した中洋折衷様式の服である。具体的に言うと、男性は長袍馬褂に西洋の皮靴、頭に白い礼帽。女性は改良された高い襟の旗袍に、西洋要素のネックレス、洋帽をかぶる格好であり、こうした格好が中層社会でもっとも流行した。

国力の衰弱とともに、清王朝の政治制度の重要な構成部分としての服飾階級制度も衰退してゆき、厳格な服飾階級区分による統治が揺らいだ。その頃になると、一般人でもお金さえあれば、各階級クラスを示す官服を手に入れることができた。天津の一部の裕福層の間では、官服の専用文様や布地などを使用したり、さらには官服を着用したりする人もいた。

民国期に入ってから、衣服の西洋化は加速し始めた。民国政権は西洋政体モデルを模倣して建てられたので、服飾の各面においても西洋を真似ることは当然のことであった。衣服の階級制度がほぼ廃止され、1912年10月に中華民国政府は男女礼服を發布した。男性は二種類の大礼服と常礼服。大礼服は洋式デザイン、常礼服は中式と洋式の二種類。この種の礼服は政界で流行した。この時期の衣生活は、全体としてまさに西洋化へ進む過程にあった。天津の衣生活については、男性は、一般に長袍馬褂、洋服、中山服、さらにさまざまにデザ

インした中洋折衷様式の服。二、三十年代の頃には、洋服や中山服は、もはや知識人や上層階級の専属服ではなくなり、その他の階級の人でも着用できるようになっていた。当時、洋服と中山服は一種の流行ファッションと見做されていた。経済的に余裕のある人は必ず洋服を備えていた。また、礼帽や皮靴、眼鏡、手袋などの西洋装身具も上層階級の衣生活の中に取り込まれていた。

女性の衣生活は、建国後の西洋化への傾向がさらに進む中で、胸部、腰部、臀部の裁断が伝統的な平面裁断法から立体裁断法へと変わってゆき、女性らしい曲線美を求め始めた。服の丈は長めのものから短めのものへ、ウエストはゆったりしたものからほっそりしたものへ、袖口は広めのものから狭めのものへと、嗜好が変化した。伝統上着と伝統ズボンをあわせた格好は、主に下層階級の女性の普段着であった。中間層や上層階級の女性は主に洋服、あるいは中洋折衷の服を着用した。中にわずか一部の帰国留学生や、流行に敏感な若い社交界の女性、知識人の間で、女性解放思潮に煽られて、男性風の衣服を着用する人もいた。当時、社会でもっとも流行した女性ファッションと言えば、伝統服と洋服の結合体である——チャイナドレスであった。その風格と特徴を具体的に挙げれば、服の丈の長さ、襟の高さ、スリットの大小、袖の付け具合、長さなど、すべての部分が西洋の最新流行ファッションの変化によって定められていた。伝統的な旗袍の形は、そこにはほとんど残っていない。文様については、本来女性の衣服に散りばめられていた多種多様の装飾文様もこの頃から簡略化され、時間が経つにつれて装飾文様は女性市民の衣生活の中からどんどん消えていった。

また、天津は新式教育が発達していたため、学生服もほかの地域と比べて富んでいた。その形は、主に西洋様式の服だった。小中学生は一般に中山服、大学生は学校によって違うが、長袍、洋服、中山服などが一般であった。女学生は一般に無地のスカートと上着。上着はやや細く小さめで、袖は比較的短く、裾はアーチ形であった。ま

た、スカートの長さは膝下までであった。

また、当時天津では、新聞や雑誌、画報などに関連する業種が発達していたため、市民は最新ファッションの情報を素早く入手でき、それが衣生活を豊かなものにした。1929年、天津利順徳飯店で“万国服装大会”が開催され、その賑わい振りには国内外の来賓を驚かせたほどであった。この時期、中国全体の流行ファッションのレベルから見ると、確かに北方は東南沿海地区より低い状態にあった。しかし、一般的に見て天津市は、大都市であり貿易港を中心としているという性質から、その衣生活は中国全体から見ると、北方最新流行ファッションの都市だと言えるのである。

新中国の時代においては、50年代末期まで経済の発展は緩慢であり、物質的条件はまだ不十分な状況であった。加えて「堅苦朴素」（質素で地味な生活に耐えること）を美とするプロレタリア的な革命精神が社会で流行していたため、その影響は真っ先にはっきりと中国全体の衣生活に映し出されていた。天津では、新中国が建国した直後に、軍服の影響を受けた。各業種の男性は、特に若い青年の中で、主に藍色、グレー、黒色の三色の軍服と中山服が愛用された。そのほか、中山服とレーニン服から生み出された“人民服”や、中山服を原型とした“青年服”、“学生服”、“軍便服”、また、上半身は伝統の綿入れの上着（伝統綿袄）に下半身は洋ズボンの組み合わせという中洋折衷の衣服が現われ、男性が愛用した。伝統服である長袍馬褂や西洋の衣服、特に背広を着る人は少なくなっていた。

当時の衣服の中にあって、特に中山服は広い範囲にわたって男性に好まれ、襟などが部分的に改良されながら、70年代末期まで人々が好んで着用した。その着用範囲はお年寄りから青年、さらには子供までに及んだ。女性の衣服においても、男性と同じ革命精神の影響のために、一般女性はレーニン服、グレーの軍服、学生服、それから中山服を原型とする“女性両用シャツ”、ソ連式の花模様の布地で作ったワンピース、伝統上着と洋ズボン、スカートなどを着用

していた。

長い袍のチャイナドレスは50年代中期に入ると、天津の衣生活の中からほとんど消えた。この時期の市民の衣生活は全体的に質素で地味であった。そして、1956年、国家から“人民の衣服を美化する”という提唱があったために、一時期、模様がほどこされたり色彩が加えられたり、また、襟などにデザインが増え、特に女性と子供の衣服の風格は少し鮮やかなものに変わった。例えば、花模様スカート、刺繍入りシャツ、花模様外套上着などが女性の中で流行した。男性の衣生活に再び背広、洋オーバーなどが現れ、一時的に流行した。しかし50年代末期に入ると、全国で“大躍進”運動がはじまり、衣生活はさらに「実用、素朴、丈夫」の方向に進んだ。その影響で、労働者、学生、政府職員、農民を問わず、人々の衣服全体が“大躍進”の色、つまり、藍色、グレー、黒色に染められた。女性は多くこの三色の“両用シャツ”を着た。そのシャツの中には、一般に小花模様の“両用シャツ”を着るが、その襟の部分を外のシャツの上に重ねることが当時のおしゃれな着方だった。男性は主に中山服、軍服を好んだ。

1960年代初期から70年代末期まで、男女の衣服は依然として“素朴”を時代の流行とした。男性の衣服は主に中山服、軍便服、開襟制服、縦襟制服、青年服、労働服、両用シャツ、ジャケット上着、ハーフ・コート、ダスター・コート、軍式綿入りコート、伝統綿入り上着などであった。一方、女性の衣服で主に流行したのは、縦襟ひとえ上着、女性用の軍便服コート、開襟シャツ、ちりめんスカート、ハーフとロングのコートなどであった。当時、文様に関しては子供服に比較的多かったが、大人の影響を受けていたせいで、やはり素朴なものが多かった。例えば、子供の制服、紅衛服、労働シャツなどである。衣服の形や布地は絶えず少しばかり変化していたとはいえ、始終“実用”、“素朴”、“すっきり”という原則に基づいて作られていた。文化大革命の十年間は、「破四旧」（旧思想、旧文化、旧風習、旧習慣）と「左翼路線」が妨害した

ため、市民の衣生活はさらに単調な色に染められた。この十年間の衣生活は、男女を問わず主に「老三色」（藍、黒、グレー）、「老三装」（中山服、青年服、軍便服）を中心としたものであり、背広やチャイナドレスなどの類の衣服はほぼ人々の生活から消えていた。小学生の衣服にも緑色の軍装をデザインしたものがあつた。当時、紅衛兵のほかに、教師、幹部、労働者、農民、知識人の中で、相当の人が萌黄色の軍服を好んで着用した。そして、布地の模様には歯車、鎌、トラック、水圧機、ナットなどの政治的な意図を表す文様を使用するものが少なくなかった。装飾品としては、萌黄色のベルト、帽子、布肩掛けカバン、毛沢東の肖像バッジなどに人気があり、その手には赤色の毛語録が握りしめられていたのである。

70年代末（1979年）からの改革開放路線による経済の発展は、天津の衣生活に目まぐるしい発展をもたらした。紡績業の発展によって、布地の品種については服装市場に絶えず新しいものが提供され、特に80年以降、国内服飾市場は逸品ぞろいになり、中国人の衣生活は改善された。また、この頃、解放思想路線にそって政府指導者から「人民の服装を美化するように」との提唱がなされ、その上、指導者自らがお手本として背広を着用したことで、人々が沸き返った。

80年代中期、中国は情報時代に向かい、テレビから流れる世界のファッションショーや流行ファッション雑誌などから大量の国外のファッション情報を得られるようになった。さらに、各種類の国内、国外ブランドの衣服が消費市場に流れ出し、その影響を受けて、天津では、特に二十代、三十代の若者の間で、国内外有名ブランドの服を着る人も現れた。市民は、主に個人の経済条件がゆるす範囲内で、自分たちが好むデザインの衣服を着用するようになった。市民は「老三装」を脱ぎ捨て、代わって、まず若者の間ではラップズボンや背広、ジーンズ、スポーツウェアファッション、スキーウェア様式の上着、ジャケット、ニッ

トウェア、Tシャツ、そして、ウールファッション、ウインドブレーカーファッション、皮革服などが流行した。その広がりの特徴としては、初めは若者男女の間であったが、次第に年配層に広がるという感じであった。衣服の色はとりどりで、以前のような「老三色」ではなくなった。また、衣服の布地も多種多様、帽子やベルト、手袋などの装飾品の種類も増えて、人々はファッションに合わせて装飾品を選択した。即ち、80年代中期以降の市民の衣生活は、衣服のデザイン、色、模様、布地、着方、着用場所や時間など、あらゆる面において、衣生活全体として、世界ファッションの流れを基準として、全国的に同じ方向で動いていった。

そのほか、90年代後半から、伝統文化を見直す社会風潮の波に乗って、これまで忘れかけていたチャイナドレスや馬褂などの伝統衣服が再び現れ、さらに伝統服から改良された新たな中国服（中式服の唐装など）も天津市民の衣生活に見ることができた。この種の服は一時的に市民の普段着として流行したが、次第に主にお正月などの伝統行事や結婚式などの儀礼の衣服として定着していった。

80年代以降の天津市民の衣生活を一言でいうと、それは全体として色彩に富んだ多種多様な伝統衣服、洋服、中洋折衷の衣服、国内外ブランドの衣服が溢れている衣服社会であると言える。まさに「近代」と「伝統」の息吹が漂っているのである。中国人の個人主義化が急速に進む中で、個性を強調するさまざまな衣服を天津の衣生活から覗くことができる。一人一人の経済条件の下で、人々は自由に、もっぱら自分の好みを基準として新しいファッション、新しいデザインの服を選ぶ、という衣生活へと成長した。まさに「個人主義」の表れといえよう。

II 現地調査について

1 天津都市住民のアンケート調査について⁷

アンケート調査地については、数多くの

地方資料を閲読し、実際にその場を十数回にわたり訪れ、何度も考察したあとで決定した。最終的には三つの場所を選択した。それは南開区の“栄遷東里”と“航天北里”，それから河西区の“銀河広場”である。“栄遷東里”と“航天北里”は天津の西南部に位置している。南開区の面積は39平方キロメートル。2005年の数字データによると人口は約79万人である。また、“銀河広場”は天津市区の東南部に位置している。河西区の面積は37平方キロメートル、人口は約71万人である。

この三ヶ所を調査の対象地として選択したのは以下の理由による。

まず、航天北里と栄遷東里を選択したのは、主にアンケート調査に当たって、筆者が特別な階層や傾向の人に偏った地区やその人々を対象にするのではなく、“一般庶民（18歳以上）”を調査対象にしたかったからである。具体的に、この二つの場所は南開区の康復路と白堤路が交差するあたりに位置しており、両区域の住居は日本の住宅団地に相似していて、しっかりと一つのコミュニティが形成されている。住居地内には個人飲食店、食品商店、床屋、自転車修理場、印刷屋など、さらに、幼稚園もあった。2006年7月末の時点の調査データによると、栄遷東里の居民区域に居民1055戸、延べ2895人が住んでいる。住居は1985年に政府からの建設資金で建てられたものであり、建物そのものは現在の高層住宅と比べて小さめで、一戸あたりの部屋面積の平均は40～50平方メートルしかない。住民のほとんどは都市建設のために、水上公園に隣接する八里台や挂甲寺などの地から引っ越しして来た⁸人ばかりで、住民委員会の人に聞いたところ、この住宅に住んでいる家庭の収入は比較的安く、貧困家庭や退職失業者も少ないとのことであった。

航天北里は栄遷東里に隣接している。栄遷東里同様2006年7月末時点の調査データによると、この居民区域は居民900戸、延べ3120人が住んでいる。住居は90年代半ばに建てられた。栄遷東里と違

って、この住居は不動産開発商人によって建てられたものである。建売住宅である為、建築面積も普通の広さで、一戸あたりの平均住居面積は約60～70平方メートル。住民の多くは天津市内の各地区から来ている。家の収入は比較的安定しているように見える。おそらく、多くは中間層の生活水準に属するといえる。したがって、この二ヶ所はまさに“一般庶民”のカテゴリーに属していると考えられる。この二つの社区・コミュニティはともに、天津の代表的な住宅団地である。

つぎに銀河広場をアンケート調査地として選択した理由は、筆者がアンケート調査を実施するに当たって、“普遍的な意味”を持つ“一般の天津市民”を調査対象にしたかったからである。市民の集いの場として、この都市広場の地理的位置と機能は特有の風格を持っている。天津市の市区南部の中環線と外環線の上に位置し、周辺には多くの高層住宅マンションがあるほかに、さらに天津市青少年活動センター、天津博物館、科学技術館などに隣接している。ここは天津市民たちにとって最も重要な公共空間であり、広さといえ最も大きな文化活動と憩いの場所である。広場は、特に週末の午後、或は休日などには大変賑やかである。中には太極拳をしている人、テープレコーダーから流れる音楽のリズムに乗って踊っている人たち、ローラースケートをしている若者たち、凧揚げを楽しんでいる人たち、バドミントンをしている人たち、将棋やランプを楽しんでいる人たち、ベンチでお茶を飲みながらおしゃべりを楽しんでいる人たち、芝生の沿道に沿ってのんびり散策している人たちなどでごった返している。この広場を訪れる市民は流動性が比較的高く、彼らの職業も地位もさまざまである。周辺に住む住民がいれば、青少年活動センターや天津博物館、科学技術館などの文化施設を訪れる人をはじめ、たまたま通りかかった人たちもいる。航天北里と榮遷東里が「静」であるのに対し、銀河広場はまさに「動」である。この二極から捉えることが、今回の調査には欠かせないと考えた。この

ような場所でアンケート調査を実施すれば、調査対象者としてカバーできる地区や階層は当然広がるであろう。このような地区を組み合わせてアンケート調査を実施することは、アンケートに普遍性を持たせたいと考える筆者の意図にまさに適している。

2 アンケート調査実施の具体的な日時と形式

アンケート調査を行う日時は主に、調査の形式や作業量、そして区域の市民の活動リズム、アンケートの回収効率の原則に基づいて決めた。調査日時は当初7月から9月末までの二ヶ月間と予定していたが、調査実施中にさまざまな問題に遭遇したため、一枚あたりのアンケート回収にかかる時間量が増えてしまい、最終的には11月初めまでにかかってしまった。

この期間に調査を実施した理由は二つ挙げられる。まずは、調査員が夏休みの時間を十分に利用して調査できるということ。そしてもう一つの主な理由は、この時期の日没時間が比較的遅いということである。外は遅くまで明るく、市民の野外活動の機会が多いので、それに伴い調査対象者に直接接触する機会も多くなるのである。さらにその場でアンケート用紙を配布、回収することが可能になることから、調査用紙の回収効率を向上させることにもつながる。

“航天北里”と“榮遷東里”の居民区域でのアンケート調査は、主に午後4時から午後7時の間で行なった。この時間帯はちょうど住民たちの夕食の買い物、また、仕事場から帰宅する時間、つまり区域内で行き来する住民や通勤者の数、さらには在宅する人の数も多いと考えたからである。そして、“銀河広場”でのアンケート調査は、主に週末と祝日休日の午後5時以後の時間に集中して行った。この広場を事前調査したところ、次の二点に気がついた。それは7、8、9月の平日の昼間、この広場を利用する人が非常に少ないということである。この理由として一つ考えられるのは、この時期はちょうど日差しが強く、その熱は地面から上昇し、広場全体が大変暑くなることであ

る。もう一つは、平日は学校や仕事に行く人が多く、この時間帯の広場ではほとんど定年退職した年配の方や博物館、科学技術館などを参観する小学生や観光客、あるいは凧を売る商人などしかいなかったことである。このような事前調査の結果から、週末や休日祝日の午後4時から午後7時の時間帯が天候も比較的涼しく、また人々がゆったりとした時間を持っていると考えられ、この時間帯に決定したのである。

アンケート調査の進展は予期していたよりも簡単ではなかった。予備調査の段階ですぐに問題に直面した。居民区域に入って、最初に当地の居民委員会と連絡を取り、当局の理解と協力を得たうえで、三つの場所に対して三回にわたって予備調査をした。調査を始めてすぐに、最初に想定した「入居」調査（戸別訪問）の形式では住民に理解が得られないということが明らかになった。調査の効率が非常に低く、一棟約30戸もの家庭をノックして、僅か三戸の家だけが渋々二重に鍵がかかったドアをあけてくれ、調査の説明をしてからようやく受け入れてくれた。さらに調査をする中で新たな問題が発生した。調査をする中で、対象者の教育水準の格差の大きさを改めて実感したのである。まったく字が読めない人がいれば、短時間で突然アンケート調査の説明をしても、その内容が理解できない人がいるのである。また屋外の調査では、眼鏡を掛けていないために目が霞んでアンケートの字がはっきり見えないというケースにも遭遇した。これらの問題にいち早く対応しなければ調査が捗らないと認識し、早速、筆者は補助調査員らと再度検討した。対応策の結論は、調査方法については、主に屋外で、無作為抽出で偶然に出会った対象者と直接に接触する調査形式をとる、というものであった。具体的には、住民に対しては、直接調査の目的を調査対象者に説明し、その場でアンケート用紙を配布する。そして、その場で対象者に質問項目を解答していただき、回収するという形式である⁹。また調査に当たって、字が読めない人、或は、質問内容が完全に理解できない人、目が霞

んで字がはっきり見えない人などに対しては、調査員たちが自ら質問事項と回答選択肢を対象者に読み上げるという方法を取った。対象者の都合によっては、調査員がアンケート用紙記入を手伝う、ということにした。このように、調査対象者一人一人の都合に基づいて調査を行うといった調査形式をとったのである。即ち、「即配布即回収」、「即問即答」という形式である。この方法を採用するにあたっては、当然、調査員の仕事の難しさと仕事量の増加を覚悟しなければならない。しかし、この方法をとることによって、調査の質が向上し、なおかつ、その場でアンケート用紙を回収するので、アンケート用紙の回収率を上げることができた。

3 聞き書きとインタビュー

アンケート調査以外に、筆者は天津でしばしば休みなどの日を利用して、中心繁華街付近のいくつかの百貨店や異なるランクのさまざまな種類の服飾市場で、市民の衣生活を観察し、また、店員や来客、街の人たちに対して聞き取り調査を実施した。また、その場で彼らにいくつかの質問をした。例えば、今の流行のファッション、ブランド、布地、服のデザインなどについてどのように考えているのか、一番売れるのはどんな衣服なのか、などである。一人一人短時間ではあるが、話す中で彼らから新たな、有力な最新情報を得ることができた。

その外、筆者は服飾企業の責任者などに連絡を取り、或は、服飾製造企業者や服飾文化学者たちと知り合って、彼らに直接、服飾の変遷の見方や彼らの衣生活に纏わるさまざまな体験などを中心として、さまざまな項目について単独インタビューを実施した。天津にある三つの服飾製造会社も参観した。また、服飾専攻の学生らと座談会を行ない、彼らが主催した服飾文化活動にも参加した。天津市以外では、筆者はまた学会発表会と休日を利用して、北京、承德、曲阜等の地においても同様な調査、考察を行なった。これらのインタビューや聞き書き調査、たま、自らの目で確認、体で感じ

たことによって、アンケートのデータに対する理解・説明をより深めることができた。これらを通じて、今回の調査をより信憑性の高いものにでき、また、天津市民における衣生活に対する認識・理解の実際に近づくことができたと考える。

4 アンケートの分配・回収結果

このアンケート調査を取り入れる初段階で、最低1,000枚を配布しなければならないという最低目標¹⁰を掲げた。三つの区域に対して、アンケート用紙の配布比は4:4:2とした。栄遷東里と航天北里の二つの居民区域に対してはそれぞれ4割に設定し、銀河広場は2割とした。アンケート調査を実施する過程で、六名の調査員を

三組に分け、それぞれ各現地で調査させた。調査中に問題が発生した場合、また、調査対象者の性別、年齢の割合などを可能な限り均等にする為に、調査中に、互いに絶えず連絡を取り合わせた。

三ヶ月あまりの間に配布したアンケート用紙は全部で1,026枚、回収した回答は1,024枚で、回収率は99.8%に達した。解答用紙のうち有効なアンケートは1,021枚。その内訳は、栄遷東里、航天北里あわせて808枚、銀河広場は213枚であった。

調査対象者の年齢と性別における具体的な状況については、下記の集計データの通りである。

表1 調査対象者の年齢と性別

年齢	男 (人)	女 (人)	性別未記入者	合計 (人)
18～30 歳	160	120	1	281
31～40 歳	102	110		212
41～50 歳	87	111	4	202
51～60 歳	79	89	1	169
61 歳以上	83	67		150
年齢未記入者			7	7
合計	511	497	13	1,021

出所) 2009年2月筆者作成

表2 調査対象者の職業

職業	人数	%
サラリーマン	279	27.3
管理職	122	12.0
幹部	81	7.9
教師	61	6.0
技術者	81	7.9
個人経営	137	13.4
その他	249	24.4
職業未記入者	11	1.1
合計	1,021	100.0

出所) 2009年2月筆者作成

表3 調査対象者の学歴

学歴	人数	%
中学以下	259	25.4
高中	395	38.7
大学	334	32.7
研究生	32	3.1
学歴未記入者	1	0.1
合計	1,021	100.0

出所) 2009年2月筆者作成

集計データのように、アンケート解答用紙には、調査の経験不足などの理由のため、数名の調査対象者が年齢・性別などを記入することを拒否した。その結果、回収アンケートの中、性別と年齢両方記入がなかったのは7名。また、性別だけの未記入者が6名おり、前の7名と合わせて年齢・性別が確定できないものが13名いた。職業未記入者は11名、学歴未記入者が1名いる。しかし、全体の調査対象者の年齢と性別の割合については、比較的均衡が取れていると思う。職業では、“その他”が割合としては24.4%とやや高いが、比較的均衡が取れている。また、学歴については、高校卒業の対象者が38.7%、大学以上は合計すると35.8%にもなる。これらの集計結果は天津市民の教育レベルが比較的高いことを反映している。ただし、注意すべきことは所謂“大学”という中には通信教育、社会人教育、その他いろいろな専門学校などが含まれていることである。

上記の三つの調査地の回収結果から見ると、その有効な回収数は基本的に当初設定した割合に達していると考えられる。

<清朝末期から民国時期までの中国衣生活と社会思想に対する認識・理解>

質問1：20世紀の初期から新中国が建国する前までの50年間、中国人の服は大きく変化した。封建階級制度を表す衣服は社会から消えていた。しかしながら、伝統の衣服はまだ存在していた。また、さらに、外国の様式の衣服も、そして中洋折衷の衣服も現れ始めた。例えば、長袍(男性用の中国式の長衣)、馬褂(チョッキ)、現代旗袍(チャイナドレス)、中山服、学生服、背広、ドレス、西式軍服など。あ

5 各質問事項とその回答集計結果

アンケート質問事項については全部で11問を設けた。前9つの質問事項(質問1～質問9)はすべて“20世紀以来の中国服飾文化と社会思想との関係”をめぐる問題である。回答選択肢はいずれも4項目で、それぞれは“大いに関係がある”、“ある程度関係がある”、“関係がない”“分からない”というものである。後の2つの質問(質問10、質問11)は、主に個人の衣生活の意識(衣服を選ぶ基準の意識、個人主体か社会主体か、また、国内産か外国産か)に関連する問題である。質問10の回答選択肢は3項目を設け、それぞれは“自分の好み”、“他人の好み”“分からない”とした。質問11の回答選択肢も3項目で、それぞれは“国産商標”、“外国商標”、“どちらでもいい”である。

これらのすべての質問に対して、選択肢から一つだけを回答するとした。質問1～質問10の内容と、それぞれの回答集計結果、年齢別集計結果(表)は以下の通りである。

なたは、この種の変化は当時、社会思想が隆盛していたことと関係があると思いますか？

質問1 回答集計結果：

表4 質問1の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
栄遷東里・航天北里	330 (40.9)	394 (48.9)	38 (4.7)	44 (5.5)
銀河広場	92 (43.8)	111(52.9)	6 (2.9)	1 (0.5)
合計人数	422 (41.5)	505 (49.7)	44 (4.3)	45 (4.4)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(未回答者：5人)

表5 質問1の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
30歳以下	108(38.6)	153 (54.6)	8 (2.9)	11 (3.9)
31～40歳	84 (39.6)	113 (53.3)	7 (3.3)	8 (3.8)
41～50歳	81 (40.9)	100 (50.5)	6 (3.0)	11(5.6)
51～60歳	82 (48.5)	77 (45.6)	7 (4.1)	3 (1.8)
61歳以上	64 (42.7)	58 (38.7)	16 (10.7)	12 (8.0)
合計人数	419 (41.5)	501 (49.7)	44 (4.4)	45 (4.5)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者は12人)

表6 質問1の性別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
男性	230 (45.2)	233 (45.8)	27 (5.3)	19 (3.7)
女性	185 (37.1)	271 (54.3)	17 (3.4)	26 (5.2)
合計人数	415 (41.2)	504 (50.0)	44 (4.4)	45 (4.5)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者13人)

表7 質問1の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
中学以下	100 (38.9)	115 (44.7)	22 (8.6)	20 (7.8)
高校	153 (38.9)	204 (51.9)	16 (4.1)	20 (5.1)
大学	151 (45.3)	172 (51.7)	6 (1.8)	4 (1.2)
大学院	18 (56.3)	13 (40.6)	0 (0.0)	1 (3.1)
合計人数	422 (41.6)	504 (49.7)	44 (4.3)	45 (4.4)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者6人)

表8 質問1の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
サラリーマン	104 (37.3)	152 (54.5)	15 (5.4)	8 (2.9)
管理職	51 (41.8)	57 (46.7)	9 (7.4)	5 (4.1)
幹部	39 (48.1)	40 (49.4)	0 (0.0)	2 (2.5)
教職	23 (37.7)	36 (59.0)	1 (1.6)	1 (1.6)
技術者	41 (50.6)	37 (45.7)	1 (1.2)	2 (2.5)
自営業	51 (37.2)	71 (51.8)	7 (5.1)	8 (5.8)
その他	111 (44.6)	108 (43.4)	11 (4.4)	19 (7.6)
合計人数	420 (41.6)	501 (49.6)	44 (4.4)	45 (4.5)

出所) 2009年2月筆者作成

注: (この問題の未回答者11人)

表4の統計結果に示したように、41.5%の人が20世紀の前半50年間において、中国における衣生活の変化は当時の社会思想の飛躍と“大いに関係がある”と認識している。“ある程度関係がある”の49.7%と合わせると91.2%となり、非常に高い率で関係があると認識していることが分かる。

表5の年齢統計結果で示したように、60歳までは年齢が高くなるにつれて“大いに関係がある”の率が高くなる傾向が見られる。一方、60歳以上に、“関係ない”と答えた人が多く見られる。これはこの年代に、「中学以下」の学歴の人が多くいることが理由となっていることが考えられる。(表7参照)

表6の男女別統計結果では、男女の比率に目立った差はないが、男性では“大いに関係がある”と“ある程度関係がある”がそれぞれ45%程度であるのに対し、女性においては“ある程度関係がある”の比率が“大いに関係がある”より約17%高い。

表7の学歴統計結果から、学歴が高くなればなるほど、両者の関係性に対して肯定的見方を持つ傾向があることが見て取れる。

表8の職業別統計結果の中で、両者に“関係ない”と答えた人の比率が最も少ないのは幹部と称する人たちで、その次に技術者、教職となる。ここでも、知識レベルの違いが、関係性の有無についての認識の差になって現れているように思われる。

<民国時期における中山服と社会思想の関わりに対する認識・理解>

質問2: あなたは、中山服の創製・流行は孫文が提唱した三民主義思想や、その他の民主、平等の思想による影響と関係があると思いますか?

質問2 回答集計結果:

表9 質問2の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
栄遷東里・航天北里	251 (31.1)	390 (48.3)	85 (10.5)	81 (10.0)
銀河広場	68 (32.1)	103 (48.6)	26 (12.3)	15 (7.1)
合計人数	319 (31.3)	493 (48.4)	111 (10.9)	96 (9.4)

出所) 2009年2月筆者作成

注: (この問題の未回答者2人)

表 10 質問 2 の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
30 歳以下	66 (23.5)	139 (49.5)	38 (13.5)	38 (13.5)
31～40 歳	70 (33.0)	101 (47.6)	24 (11.3)	17 (8.0)
41～50 歳	68 (34.0)	96 (48.0)	22 (11.0)	14 (7.0)
51～60 歳	56 (33.1)	83 (49.1)	17 (10.1)	13 (7.7)
61 歳以上	57 (38.0)	69 (46.0)	10 (6.7)	14 (9.3)
合計人数	317 (31.3)	488 (48.2)	111 (11.0)	96 (9.5)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 9 人)

表 11 質問 2 の性別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
男性	177 (34.6)	235 (45.9)	54 (10.5)	46 (9.0)
女性	138 (27.7)	254 (50.9)	57 (11.4)	50 (10.0)
合計	315 (31.2)	489 (48.4)	111 (11.0)	96 (9.5)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 10 人)

表 12 質問 2 の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
中学以下	81 (31.4)	111 (43.0)	28 (10.9)	38 (14.7)
高校	117 (29.7)	201 (51.0)	41 (10.4)	35 (8.9)
大学	107 (32.0)	166 (49.7)	39 (11.7)	22 (6.6)
大学院	13 (40.6)	15 (46.9)	3 (9.4)	1 (3.1)
合計	318 (31.2)	493 (48.4)	111 (10.9)	96 (9.4)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 3 人)

表 13 質問 2 の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
サラリーマン	103 (36.9)	121 (43.4)	27 (9.7)	28 (10.0)
管理職	44 (36.1)	60 (49.2)	12 (9.8)	6 (4.9)
幹部	28 (34.1)	41 (50.0)	9 (11.0)	4 (4.9)
教職	15 (24.6)	38 (62.3)	6 (9.8)	2 (3.3)
技術者	25 (30.9)	40 (49.4)	9 (11.1)	7 (8.6)
自営業	35 (25.2)	71 (51.1)	17 (12.2)	16 (11.5)
その他	67 (26.9)	119 (47.8)	30 (12.0)	33 (13.3)
合計	317 (31.3)	490 (48.4)	110 (10.9)	96 (9.5)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 8 人)

表9より、質問2の中山服と、孫文の提唱した三民主義思想や民主・平等などの思想との関りについても、ほぼ80%の回答者が、その関りの存在を肯定的に認識していることがわかる。その一方で“関係ない”、“分らない”とする人がそれぞれ約10%いる。問1よりも多くなっているのは、「孫文」、「三民主義」、「中山服」という具体的な事項について、断定的に判断できない人が多かったことが考えられる。

表10においては、“ある程度関係がある”とする人は、年代間であまり差がなく、それぞれ50%弱となっているが、“大いに関係がある”とする人は、年齢が上がるにつれて増加する傾向にあり、30歳未満と60歳以上では約15%の開きがある。孫文は1925年に亡くなっており、孫文と同時代に生きた人はほとんどいないが、1980

年ころまで中国で広く着用された「人民服」の原型になったのが「中山服」であり、対象者の人生体験や受けた教育の違いが、その差に現れていることが考えられる。

表11については、問1と同じ傾向が見られる。つまり、“関係ない”、“分らない”とする率は、男女でほぼ同じであるのに対し、関係性を認める人の合計は男女ほぼ同じ率になっているものの、男性のほうが“大いに関係がある”と、より断定的に関係性を認める傾向にあることが読み取れる。そして、学歴から見ると、大学院のような高学歴を持つ人の方が、関係性を認める傾向が高いことが分かる(表12)。

また職業を見ると、関係性を認める回答(“大いに関係がある”+“ある程度関係がある”)の率は高いほうから、教職、管理職、幹部の順となる(表13)。

<民国時期、一部の礼服と見なされた衣服に対する認識・理解>

質問3：民国時期に入って、中山服以外の長袍、馬褂、現代旗袍(チャイナドレス)は国民に愛され、当時の政治要人ら(例えば、孫文、蒋介石、魯迅、宋氏姉妹など)にも好まれて着用された。なおかつ、これらの服は国の礼服として認められた。この現象は当時の熱烈な中華民族意識(中華イデオロギー)と関係があると思いますか。

質問3 回答集計結果：

表14 質問3の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分らない (%)
栄遷東里・航天北里	292 (36.2)	396 (49.1)	64 (7.9)	55 (6.8)
銀河広場	86 (40.8)	105 (49.8)	12 (5.7)	8 (3.8)
合計人数	378 (37.1)	501 (49.2)	76 (7.5)	63 (6.2)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者3人)

表15 質問3の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分らない (%)
30歳以下	97 (34.5)	136 (48.4)	24 (8.5)	24 (8.5)
31~40歳	78 (36.8)	107 (50.5)	18 (8.5)	9 (4.2)
41~50歳	70 (35.2)	108 (54.3)	11 (5.5)	10 (5.0)
51~60歳	68 (40.2)	79 (46.7)	13 (7.7)	9 (5.3)
61歳以上	63 (42.0)	66 (44.0)	10 (6.7)	11 (7.3)
合計人数	376 (37.2)	496 (49.1)	76 (7.5)	63 (6.2)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者10人)

表 16 質問 3 の性別人数・率

性別	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
男性	195 (38.2)	244 (47.7)	44 (8.6)	28 (5.5)
女性	180 (36.1)	253 (50.7)	31 (6.2)	35 (7.0)
合計	375 (37.1)	497 (49.2)	75 (7.4)	63 (6.2)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注 (この問題の未回答者 11 人)

表 17 質問 3 の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
中学以下	98 (38.0)	107 (41.5)	22 (8.5)	31 (12.0)
高校	139 (35.4)	198 (50.4)	38 (9.7)	18 (4.6)
大学	124 (37.1)	185 (55.4)	13 (3.9)	12 (3.6)
大学院	17 (53.1)	10 (31.3)	3 (9.4)	2 (6.3)
合計	378 (37.2)	500 (49.2)	76 (7.5)	63 (6.2)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注 : (この問題の未回答者 4 人)

表 18 質問 3 の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
サラリーマン	102 (36.6)	141 (50.5)	20 (7.2)	16 (5.7)
管理職	38 (31.1)	69 (56.6)	10 (8.2)	5 (4.1)
幹部	32 (39.0)	43 (52.4)	4 (4.9)	3 (3.7)
教職	26 (42.6)	31 (50.8)	3 (4.9)	1 (1.6)
技術者	41 (50.6)	34 (42.0)	3 (3.7)	3 (3.7)
自営業	52 (37.7)	64 (46.4)	10 (7.2)	12 (8.7)
その他	85 (34.1)	115 (46.2)	26 (10.4)	23 (9.2)
合計	376 (37.2)	497 (49.1)	76 (7.5)	63 (6.2)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注 : (この問題の未回答者 9 人)

質問 3 については、表 14 のように、回答者の約 86%以上が“大いに関係がある”，あるいは“ある程度関係がある”と回答しており，多くの人が，関係性があると認識していることが分かる。

表 15 から，高齢層になるにつれて“大いに関係がある”を回答した割合が高くなるが，“ある程度関係がある”まで含めた場合，年齢層別の違いはほとんどなくなっており，この項目について，年齢層の違いに顕著な差は見られない。また，性別による差もほ

とんど見られない (表 16)。

表 17 から，大学院の人は“大いに関係がある”の回答率が最も高く，他のカテゴリーよりそれぞれ 15%程度高くなっている。ただし，“ある程度関係がある”を含めた場合，ほぼ同率に近くなる。職業別では，“大いに関係がある”の回答率で技術者だけが 50%を超えている。ただし，この設問でも，サラリーマン・管理職・幹部・教職のグループでそれぞれ 50%を超えており，大きな差は認められない (表 18)。

＜文革期における特有な服飾文化の形成と社会主体思想との関係に対する認識＞

質問4：新中国が誕生してから改革開放までの30年間、中国人の衣生活は急速に単調化に向かって進み、次第に三種類の衣服（“軍便服”，“学生服”，“毛式服”），三種類の色彩（藍色，綠色，灰色）がほぼ中国全体の服飾文化を覆うまでに発展した。あなたは、この現象は当時の極端な、偏った社会主体思想が社会全体をコントロールしたことで関係があると思いますか。

質問4 回答集計結果：

表19 質問4の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
栄遷東里と航天北里	357(44.5)	331(41.2)	58(7.2)	57(7.1)
銀河広場	107(50.7)	73(34.6)	22(10.4)	9(4.3)
合計人数	464(45.8)	404(39.8)	80(7.9)	66(6.5)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者7人)

表20 質問4の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
30歳以下	96 (34.5)	114 (41.0)	37 (13.3)	31 (11.2)
31～40歳	90 (42.9)	92 (43.8)	16 (7.6)	12 (5.7)
41～50歳	93 (46.3)	86 (42.8)	11 (5.5)	11 (5.5)
51～60歳	99 (58.6)	62 (36.7)	5 (3.0)	3 (1.8)
61歳以上	84 (56.4)	45 (30.2)	11 (7.4)	9 (6.0)
合計人数	462 (45.9)	399 (39.6)	80 (7.9)	66 (6.6)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者14人)

表21 質問4の性別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
男性	244 (47.6)	191 (37.2)	44 (8.6)	34 (6.6)
女性	214 (43.4)	212 (43.0)	35 (7.1)	32 (6.5)
合計	458 (45.5)	403 (40.1)	79 (7.9)	66 (6.6)

出所) 2009年2月筆者作成 注 (この問題の未回答者15人)

表 22 質問 4 の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
中学以下	120 (47.1)	94 (36.9)	18 (7.1)	23 (9.0)
高校	164 (41.7)	170 (43.3)	33 (8.4)	26 (6.6)
大学	164 (49.2)	129 (38.7)	24 (7.2)	16 (4.8)
研究生	16 (50.0)	10 (31.3)	5 (15.6)	1 (3.1)
合計	464 (45.8)	403 (39.8)	80 (7.9)	66 (6.5)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 8 人)

表 23 質問 4 の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係ない (%)	分からない (%)
サラリーマン	130 (47.1)	112 (40.6)	21 (7.6)	13 (4.7)
管理職	53 (43.4)	57 (46.7)	8 (6.6)	4 (3.3)
幹部	46 (56.1)	26 (31.7)	8 (9.8)	2 (2.4)
教職	28 (45.2)	29 (46.8)	5 (8.1)	0 (.0)
技術者	36 (44.4)	32 (39.5)	8 (9.9)	5 (6.2)
自営業	57 (41.6)	53 (38.7)	12 (8.8)	15 (10.9)
その他	110 (44.4)	94 (37.9)	18 (7.3)	26 (10.5)
合計	460 (45.6)	403 (40.0)	80 (8.0)	65 (6.4)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 13 人)

質問 4 のアンケート結果を見ると、多くの人たちが、この時期の衣生活の変化は当時の社会思想と関わっていると認識していることが分かる。“大いに関係がある”の回答率は 45.8%まで達し、“ある程度関係がある”と合わせると 85.6%となる (表 19)。

表 20 (年齢別) から、30 歳以下の年齢層で関係があると認識している人の率が低い傾向があるのが分かる。この層では、“関係がない”13.3%、“分からない”11.2%と、他の年齢層と開きがある。この層の多くは、改革開放以降に生まれた世代であり、改革開放以前についての認識があまりない人が増えていることがうかがえる。一方、30 歳以上の層では、多くの人に関係性の存在を認識している。とりわけ 51～60 歳の層では、169 人中“関係がない”と答えた人はわずかに 5 人、“分からない”と答えた人も 3 人と、関係性を認識する人が非常に多い結果となった。

性別の統計結果においては、目立った差異はないが、若干男性の“大いに関係がある”の回答率が高い (表 21)。

また表 22 (学歴別) では、どの層も 40～50%が“大いに関係がある”と回答しており、大きな差は認められない。その正反対の“関係がない”の回答率では、大学院の学歴をもつ人が若干高い比率となった。大学院生の層は、母集団が 32 名と、他の層と比較して総数が少ないため、一人の回答の違いによって率が変わる幅が大きくなってしまいう傾向にある。それにしても 32 名中 5 名が“関係がない”と答えているのは、やはり一つの傾向と見るべきだろう。

表 23 (職業別) を見ると、“大いに関係がある”の回答率の中で、幹部の層が最も高くなっているが、“ある程度関係がある”までを合計した場合、教職の層が 92.0%と、最も多くなる。管理職も 90.1%が関係性を認識しており、幹部 (87.8%)

はサラリーマン（87.7%）とほぼ同率 となる。

<文革中、一部伝統の衣服と洋服の消失に対する認識・理解>

質問5：新中国の誕生から改革開放まで、特に文化大革命の頃、長袍・馬褂・現代旗袍といった類の一部の伝統衣服と背広、ドレスなど西洋の要素を持った衣服が、服飾市場からほぼ姿を消した。この現象は、当時の人々が自ら革命的立場であることを表すために着用することを望まなかったこと、或は批判される対象になることを恐れて着用することが出来なかったことと関係がありますか？

質問5 回答集計結果：

表 24 質問5の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
栄遷東里と航天北里	304 (37.8)	330 (41.0)	120 (14.9)	50 (6.2)
銀河広場	73 (34.4)	80 (37.7)	46 (21.7)	13 (6.1)
合計人数	377 (37.1)	410 (40.4)	166 (16.3)	63 (6.2)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者5人)

表 25 質問5の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
30歳以下	73 (26.1)	110 (39.3)	70 (25.0)	27 (9.6)
31~40歳	65 (31.0)	100 (47.6)	35 (16.7)	10 (4.8)
41~50歳	85 (42.3)	76 (37.8)	26 (12.9)	14 (7.0)
51~60歳	76 (45.0)	71 (42.0)	19 (11.2)	3 (1.8)
61歳以上	76 (51.0)	49 (32.9)	15 (10.1)	9 (6.0)
合計人数	375 (37.2)	406 (40.2)	165 (16.4)	63 (6.2)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者12人)

表 26 質問5の性別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
男性	192 (37.4)	195 (38.0)	94 (18.3)	32 (6.2)
女性	181 (36.6)	211 (42.6)	72 (14.5)	31 (6.3)
合計	373 (37.0)	406 (40.3)	166 (16.5)	63 (6.3)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者13人)

表 27 質問 5 の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
中学以下	94 (36.7)	91 (35.5)	45 (17.6)	26 (10.2)
高校	155 (39.4)	158 (40.2)	56 (14.2)	24 (6.1)
大学	116 (34.7)	149 (44.6)	59 (17.7)	10 (3.0)
大学院	11 (34.4)	12 (37.5)	6 (18.8)	3 (9.4)
合計	376 (37.0)	410 (40.4)	166 (16.4)	63 (6.2)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 6 人)

表 28 質問 5 の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
サラリーマン	107 (38.8)	101 (36.6)	48 (17.4)	20 (7.2)
管理職	37 (30.1)	61 (49.6)	21 (17.1)	4 (3.3)
幹部	28 (34.1)	35 (42.7)	17 (20.7)	2 (2.4)
教職	22 (35.5)	34 (54.8)	5 (8.1)	1 (1.6)
技術者	36 (44.4)	27 (33.3)	14 (17.3)	4 (4.9)
自営業	42 (30.7)	61 (44.5)	20 (14.6)	14 (10.2)
その他	103 (41.4)	89 (35.7)	40 (16.1)	17 (6.8)
合計	375 (37.1)	408 (40.4)	165 (16.3)	62 (6.1)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 11 人)

質問 5 の統計結果を見ると、人々は両者の関係に対して比較的高い認識を持っていると言える。しかし、表 24 で示したように、“関係がない”あるいは“分からない”と答えた人は 22、5%以上にも及んでいた。

このことは年齢別で見た場合、30歳以下に顕著で、“関係がない”は 25.0%、“分からない”は 9.6%になり、3人に1人以上が“関係がない”あるいは“分からない”と答えている。これは、おそらく 30歳以下の回答者がその当時の情勢について、実際自ら体験していないことによる結果ではないかと思う。一方、“大いに関係がある”と“ある程度関係がある”の合計は、31歳から40歳の層では 78.6%、41歳以上の層ではすべて 80%を超えている。51歳～

60歳の層では 87.0%の人が、関係性を認識していることになる。また、61歳以上の層では 51.0%の人が“大いに関係がある”と回答しており、自らの体験の有無がアンケート結果に顕著に現れていると考えられる。(表 25)。

また、性別(表 26)、学歴(表 27)については、目立った差異は認められない。表 28(職業別)から、“大いに関係がある”と回答した人の比率は、1位技術者、2位「その他」となっているが、“ある程度関係がある”まで含めた関係性を認める回答者の合計では教職の層が 90.3%と、圧倒的に多くなる。次に管理職の 79.7%が続くが、以下それぞれの層に大きな差は認められない。

＜台湾や香港，海外華僑における中国服飾文化に対する，天津の人々の捉え方＞

質問6：一時，中国女性の衣服を代表する現代旗袍（チャイナドレス）は中国大陸で姿を消していた．しかし，香港や台湾，海外華僑の女性社会の中で，その種の衣服は依然として衣生活の中で定着していて，女性に好んで愛用されてきた．あなたは，これは現代旗袍が定着していた地域に普遍的に存在する「伝統文化を重んじ，個人の社会的価値観を尊重する」考え方と関係があると思いますか？

質問6 回答集計結果：

表 29 質問6の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
栄遷東里と航天北里	231 (28.7)	418 (52.0)	105 (13.1)	50 (6.2)
銀河広場	57 (27.0)	122 (57.8)	23 (10.9)	9 (4.3)
合計人数	288 (28.4)	540 (53.2)	128 (12.6)	59 (5.8)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者6人)

表 30 質問6の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
30歳以下	70 (24.9)	146 (52.0)	50 (17.8)	15 (5.3)
31～40歳	51 (24.3)	124 (59.0)	31 (14.8)	4 (1.9)
41～50歳	66 (33.0)	103 (51.5)	16 (8.0)	15 (7.5)
51～60歳	51 (30.2)	92 (54.4)	17 (10.1)	9 (5.3)
61歳以上	47 (31.8)	71 (48.0)	14 (9.5)	16 (10.8)
合計人数	285 (28.3)	536 (53.2)	128 (12.7)	59 (5.9)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者13人)

表 31 質問6の性別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
男性	153 (29.9)	257 (50.3)	67 (13.1)	34 (6.7)
女性	128 (25.8)	283 (57.1)	61 (12.3)	24 (4.8)
合計	281 (27.9)	540 (53.6)	128 (12.7)	58 (5.8)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者14人)

表 32 質問 6 の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
中学以下	75 (29.2)	120 (46.7)	33 (12.8)	29 (11.3)
高校	116 (29.7)	208 (53.2)	44 (11.3)	23 (5.9)
大学	86 (25.7)	195 (58.4)	46 (13.8)	7 (2.1)
大学院	11 (34.4)	16 (50.0)	5 (15.6)	0 (.0)
合計	288 (28.4)	539 (53.2)	128 (12.6)	59 (5.8)

出所) 2009年2月筆者作成 注:(この問題の未回答者7人)

表 33 質問 6 の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
サラリーマン	74 (26.9)	146 (53.1)	35 (12.7)	20 (7.3)
管理職	37 (30.1)	69 (56.1)	11 (8.9)	6 (4.9)
幹部	26 (32.1)	42 (51.9)	12 (14.8)	1 (1.2)
教職	13 (21.0)	45 (72.6)	3 (4.8)	1 (1.6)
技術者	21 (25.9)	42 (51.9)	17 (21.0)	1 (1.2)
自営業	39 (28.3)	71 (51.4)	18 (13.0)	10 (7.2)
その他	75 (30.1)	122 (49.0)	32 (12.9)	20 (8.0)
合計	285 (28.2)	537 (53.2)	128 (12.7)	59 (5.8)

出所) 2009年2月筆者作成 注:(この問題の未回答者12人)

質問 6 については、“大いに関係がある”と回答した人が 28.4%と、30%をきる結果となった。しかし、“ある程度関係がある”を選択した人は 50%を超え、結果的に「関係がある」と認識している人が多い、という結果になった(表 29)。

年齢別(表 30)と性別(表 31)においては、特に顕著な違いは認められなかった。

学歴別(表 32)の結果を見ると、中学以下の回答者で“分からない”としている人が

12.8%、また、“分からない”としている人も 11.3%おり、合計 24.1%。中学以下の学歴の人のほぼ 4人に1人が、関係性を認めていないという結果となった。

職業別(表 33)では、教職の層が“大いに関係がある”とした率が低いという結果になったが、この層は 72.6%が“ある程度関係がある”を選択しており、その合計は 93.6%となり、きわめて高い数字になった。

<改革開放後の衣生活の多様性と、社会思想の関わりに対する天津市民の捉え方>

質問 7 : 改革開放後の約 20 年間、中国人の衣生活は猛スピードで多様化、ファッション化、個性化へと向かって進んできた。あなたは、この局面の形成は社会思想、観念が開放されたことと関係があると思いますか？

質問7 回答集計結果：

表 34 質問7の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
栄遷東里と航天北里	429 (53.5)	315 (39.3)	32 (4.0)	26 (3.2)
銀河広場	112 (53.3)	81 (38.6)	8 (3.8)	9 (4.3)
合計人数	541 (53.5)	396 (39.1)	40 (4.0)	35 (3.4)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者9人)

表 35 質問7の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
30歳以下	155 (55.6)	102 (36.6)	10 (3.6)	12 (4.3)
31～40歳	91 (43.3)	98 (46.7)	14 (6.7)	7 (3.3)
41～50歳	105 (52.5)	77 (38.5)	10 (5.0)	8 (4.0)
51～60歳	96 (57.1)	67 (39.9)	1 (0.6)	4 (2.4)
61歳以上	90 (60.8)	49 (33.1)	5 (3.4)	4 (2.7)
合計人数	537 (53.4)	393 (39.1)	40 (4.0)	35 (3.5)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者16人)

表 36 質問7の性別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
男性	287 (56.2)	187 (36.6)	23 (4.5)	14 (2.7)
女性	248 (50.3)	207 (42.0)	17 (3.4)	21 (4.3)
合計	535 (53.3)	394 (39.2)	40 (4.0)	35 (3.5)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者17人)

表 37 質問7の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
中学以下	129 (50.8)	95 (37.4)	19 (7.5)	11 (4.3)
高校	207 (52.9)	154 (39.4)	15 (3.8)	15 (3.8)
大学	181 (54.2)	139 (41.6)	6 (1.8)	8 (2.4)
大学院	24 (75.0)	7 (21.9)	0 (.0)	1 (3.1)
合計	541 (53.5)	395 (39.1)	40 (4.0)	35 (3.5)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者10人)

表 38 質問 7 の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
サラリーマン	127 (46.2)	129 (46.9)	9 (3.3)	10 (3.6)
管理職	60 (48.8)	54 (43.9)	6 (4.9)	3 (2.4)
幹部	45 (54.9)	34 (41.5)	1 (1.2)	2 (2.4)
教職	33 (53.2)	27 (43.5)	1 (1.6)	1 (1.6)
技術者	53 (65.4)	25 (30.9)	1 (1.2)	2 (2.5)
自営業	69 (50.0)	53 (38.4)	8 (5.8)	8 (5.8)
その他	150 (61.0)	73 (29.7)	14 (5.7)	9 (3.7)
合計	537 (53.3)	395 (39.2)	40 (4.0)	35 (3.5)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 14 人)

質問 7 を見ると、改革開放以来の中国人の衣生活の変化は、その時期の社会思想が解放されたことと関係があると、多くの人が認識していることが分かる。その回答率は 92.6% に達した (表 34)。

さらに、異なる年齢層や異なる性別においても、それぞれはこのような高い率になっている。特に 51~60 歳の層では母集団 168 名中、“関係がない”とした人はわずかに 1 名、“分からない”とした人も 4 名にとどまった。この傾向は 60 歳以上の層でも見られ、その中で“大いに関係がある”と認識

している率はもっとも高くなっていて (60.8%)、比較的高い年齢層の人に、関係性を強く認識している傾向がうかがえる。

(表 35, 表 36)

学歴においては、高学歴になるにつれてこのような認識が高くなる (表 37)。

さらに、どの職業の層においても、関係性を認める認識が高い回答率を得ている。この設問では、幹部・教職・技術者に関係性を認める人が多かったが、特に技術者において、それを強く認識している傾向が見られた。(表 38)。

<服飾市場における伝統衣服の増加に対する認識・理解>

質問 8 : 今日、中国服飾市場においては、多くの民族、または伝統の要素をもった衣服を見ることができる。例えば、唐装、新デザインのチャイナドレス、馬褂、馬甲、腹掛け、漢服など。あなたは、この種の現象は、現在社会で流行っている、「もう一度伝統文化の精髓を見直し、伝統文化の精髓を受け継ぐ」といった各種の社会思潮と関係があると思いますか？

質問 8 回答集計結果:

表 39 質問 8 の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
栄遷東里と航天北里	197 (24.5)	461 (57.3)	102 (12.7)	44 (3.5)
銀河広場	53 (25.5)	124 (59.6)	21 (10.1)	10 (4.8)
合計人数	250 (24.7)	585 (57.8)	123 (12.2)	54 (5.3)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 9 人)

表 40 質問 8 の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
30 歳以下	65 (23.3)	153 (54.8)	44 (15.8)	17 (6.1)
31～40 歳	47 (22.4)	129 (61.4)	24 (11.4)	10 (4.8)
41～50 歳	53 (26.5)	111 (55.5)	26 (13.0)	10 (5.0)
51～60 歳	40 (23.8)	106 (63.1)	13 (7.7)	9 (5.4)
61 歳以上	44 (29.7)	82 (55.4)	15 (10.1)	7 (4.7)
合計人数	249 (24.8)	581 (57.8)	122 (12.1)	53 (5.3)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 16 人)

表 41 質問 8 の性別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
男性	122 (23.9)	286 (56.0)	80 (15.7)	23 (4.5)
女性	126 (25.6)	296 (60.0)	41 (8.3)	30 (6.1)
合計	248 (24.7)	582 (58.0)	121 (12.1)	53 (5.3)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 17 人)

表 42 質問 8 の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
中学以下	80 (31.4)	124 (48.6)	31 (12.2)	20 (7.8)
高校	93 (23.8)	226 (57.9)	51 (13.1)	20 (5.1)
大学	66 (19.8)	215 (64.4)	39 (11.7)	14 (4.2)
大学院	11 (34.4)	19 (59.4)	2 (6.3)	0 (.0)
合計	250 (24.7)	584 (57.8)	123 (12.2)	54 (5.3)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 10 人)

表 43 質問 8 の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係があ る (%)	関係がない (%)	分からない (%)
サラリーマン	73 (26.6)	146 (53.3)	40 (14.6)	15 (5.5)
管理職	30 (24.6)	73 (59.8)	15 (12.3)	4 (3.3)
幹部	14 (17.1)	59 (72.0)	6 (7.3)	3 (3.7)
教職	15 (24.2)	43 (69.4)	4 (6.5)	0 (0)
技術者	17 (21.3)	48 (60.0)	12 (15.0)	3 (3.8)
自営業	39 (28.3)	68 (49.3)	19 (13.8)	12 (8.7)
その他	59 (23.8)	145 (58.5)	27 (10.9)	17 (6.9)
合計	247 (24.6)	582 (57.9)	123 (12.2)	54 (5.4)

出所) 2009年2月筆者作成

注:(この問題の未回答者15人)

質問 8 については、“ある程度関係がある”とした人が多く、“大いに関係がある”と強く肯定する人は全体の 24.7%と 4人中 1名にとどまった。ただし“ある程度関係がある”を合わせると 82.5%となり、5人中 4人以上が関係性を認める認識を示した。(表 40)

各年齢層において、年代別の差は顕著には認められない。

さらに、学歴別の統計結果を見ると、異なる学歴を持っていても、それぞれ“ある程

度関係がある”を認識している人は比較的に割合が高いことが分かる。その中で、大学院生の層は“関係がない”としたのは 32名中わずかに 2名。また、“大いに関係がある”とした人の率も 34.4%と、比較的強く関係性を認識していることがうかがえる。(表 42)

職業別の統計結果では、顕著な差は見られないが、ここでも教職関係者が設問の関係性を強く認識している傾向がうかがえる。(表 43)。

<現在、人生儀礼用の衣服に対する認識・理解>

質問 9 : この 100年あまりの間、程度の違いはあるものの、中国庶民は冠婚葬祭などの活動を、伝統儀礼の規範に従って行うという現象が存在し、今日に至っている。(例えば、お葬式を行う時、死者に“寿衣”を着せる。また、家族は白い麻の服と、喪章をつけなければならないなど。) これらの現象は、伝統文化が中国社会にもたらした影響と関係があると思いますか？

質問9 回答集計結果：

表 44 質問9の回答人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
栄遷東里と航天北里	402 (49.9)	320 (39.8)	61 (7.6)	22 (2.7)
銀河広場	86 (41.0)	94 (44.8)	19 (9.0)	11 (5.2)
合計人数	488 (48.1)	414 (40.8)	80 (7.9)	33 (3.2)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者6人)

表 45 質問9の年齢別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
30歳以下	130 (46.4)	111 (39.6)	26 (9.3)	13 (4.6)
31~40歳	100 (47.6)	93 (44.3)	11 (5.2)	6 (2.9)
41~50歳	88 (43.8)	86 (42.8)	19 (9.5)	8 (4.0)
51~60歳	82 (48.5)	76 (45.0)	10 (5.9)	1 (.6)
61歳以上	86 (58.1)	44 (29.7)	13 (8.8)	5 (3.4)
合計人数	486 (48.2)	410 (40.7)	79 (7.8)	33 (3.3)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者13人)

表 46 質問9の性別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
男性	263 (51.3)	188 (36.6)	45 (8.8)	17 (3.3)
女性	221 (44.7)	223 (45.1)	34 (6.9)	16 (3.2)
合計	484 (48.1)	411 (40.8)	79 (7.8)	33 (3.3)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者14人)

表 47 質問9の学歴別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
中学以下	127 (49.6)	100 (39.1)	17 (6.6)	12 (4.7)
高校	178 (45.4)	159 (40.6)	39 (9.9)	16 (4.1)
大学	166 (49.7)	140 (41.9)	23 (6.9)	5 (1.5)
大学院	17 (53.1)	14 (43.8)	1 (3.1)	0 (0.0)
合計	488 (48.1)	413 (40.7)	80 (7.9)	33 (3.3)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者7人)

表 48 質問 9 の職業別人数・率

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
サラリーマン	142 (51.4)	99 (35.9)	27 (9.8)	8 (2.9)
管理職	55 (44.7)	54 (43.9)	13 (10.6)	1 (.8)
幹部	43 (52.4)	34 (41.5)	4 (4.9)	1 (1.2)
教職	20 (32.3)	36 (58.1)	3 (4.8)	3 (4.8)
技術者	41 (51.3)	32 (40.0)	5 (6.3)	2 (2.5)
自営業	56 (40.6)	60 (43.5)	14 (10.1)	8 (5.8)
その他	130 (52.4)	94 (37.9)	14 (5.6)	10 (4.0)
合計	487 (48.3)	409 (40.5)	80 (7.9)	33 (3.3)

出所) 2009 年 2 月筆者作成

注 : (この問題の未回答者 1 2 人

質問 9 の問題は、伝統儀礼（主に中国特有の伝統的な衣生活現象）は、伝統文化が中国社会にもたらした影響によるものであると認識しているかを問う内容である。論理的にやや難しいが、“大いに関係がある”と“ある程度関係がある”を合わせて 88.9%と、やはり高い回答率が得られた。(表 44)

また年齢別では、60 歳以上の層で 60% 近い人が、“大いに関係がある”と明確に認識していた。さらに、どの年齢層においても、“大いに関係がある”の回答率が“ある程度関係がある”の率を上回っており、人々がより強くこの関係性を認識している様子がうかがえた(表 45)。

性別では、男性がより明確にこの認識を

持っている傾向にあるが、“ある程度関係がある”を含めた場合は、わずかであるが女性の率が男性を上回る。(表 46)

また、学歴を問わず、多くの割合の人が“大いに関係がある”の認識を示した。また、大学院の層では、32 名中 1 名のみが“関係がない”としたのにとどまった。(表 47)。

職業別については、教職の層で“大いに関係がある”とする人が目立って少ない傾向にある(32.3%)。しかし、“ある程度関係がある”という認識は 58.1%に達しており、緩やかではあるものの関係性を認める率は他の職業層と比較して高い部類に入る。(表 48)。

<衣服を選ぶ人々の態度>

質問 10 : あなたは衣服を選ぶときに、一般に自分の好みを基準として選んでいますか？

それとも第三者の好みを基準として選んでいますか？

質問 10 回答集計結果 :

表 49 質問 10 の回答人数・率

	自分の好み (%)	他人の好み (%)	分からない (%)
栄遷東里と航天北里	728 (90.5)	46 (5.7)	30 (3.7)
銀河広場	195 (93.3)	6 (2.9)	8 (3.8)
合計人数	923 (91.1)	52 (5.1)	38 (3.8)

出所) 2009 年 2 月筆者作成

注 : (この問題の未回答者 8 人)

表 50 質問 10 の年齢別人数・率

	自分の好み (%)	他人の好み (%)	分からない (%)
30 歳以下	248 (88.6)	17 (6.1)	15 (5.4)
31～40 歳	191 (91.0)	12 (5.7)	7 (3.3)
41～50 歳	185 (92.5)	9 (4.5)	6 (3.0)
51～60 歳	160 (94.7)	2 (1.2)	7 (4.1)
61 歳以上	134 (90.5)	11 (7.4)	3 (2.0)
合計人数	918 (91.2)	51 (5.1)	38 (3.8)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 14 人)

表 51 質問 10 の性別人数・率

	自分の好み (%)	他人の好み (%)	分からない (%)
男性	462 (90.6)	28 (5.5)	20 (3.9)
女性	454 (91.7)	23 (4.6)	18 (3.6)
合計	916 (91.1)	51 (5.1)	38 (3.8)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 16 人)

表 52 質問 10 の学歴別人数・率

	自分好み (%)	他人好み (%)	分からない (%)
中学以下	231 (90.6)	15 (5.9)	9 (3.5)
高校	352 (90.0)	24 (6.1)	15 (3.8)
大学	310 (92.8)	12 (3.6)	12 (3.6)
大学院	29 (90.6)	1 (3.1)	2 (6.3)
合計	922 (91.1)	52 (5.1)	38 (3.8)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 9 人)

表 53 質問 10 の職業別人数・率

	自分好み (%)	他人好み (%)	分からない (%)
サラリーマン	245 (89.1)	19 (6.9)	11 (4.0)
管理職	114 (93.4)	4 (3.3)	4 (3.3)
幹部	75 (91.5)	4 (4.9)	3 (3.7)
教職	56 (91.8)	4 (6.6)	1 (1.6)
技術者	77 (95.1)	2 (2.5)	2 (2.5)
自営業	121 (87.7)	8 (5.8)	9 (6.5)
その他	231 (93.1)	10 (4.0)	7 (2.8)
合計	919 (91.3)	51 (5.1)	37 (3.7)

出所) 2009 年 2 月筆者作成 注: (この問題の未回答者 14 人)

質問 10 は、主に、天津市民の衣服を選択する基準について問う内容である。このアンケートの結果から、多数の市民は、衣服を選択する際に“他人の好み”を基準としていないことがうかがえる（表 49）。

さらに、年齢、性別、学歴や職業などの要素にほとんど関係なく、同じような結果が得られた。（表 50—表 53）

この結果から、今日の中国の都市市民は、衣服を選択する際に、主に自分の意思で決めているということが言える。この結果は当然のように思われるかもしれないが、中

国においては、1980年頃まで、ほとんどの人が人民服を着用していたのであり、また、質問 4 で見たように、当時の人々の服装が社会情勢、思想に大きく影響され規制されていたと、多くの人が認識しているのである。

この質問 10 の集計結果は、私たち日本人にも共感できるものである。政治は共産主義、経済は自由主義といわれる中国において、人々が服装を選択する場面において、現代の私たちの感覚に近い意識で選択していることがうかがえるのである。

質問 11：あなたは、衣服を選ぶときに、主に国内のブランドに注目しているか、それとも外国ブランドに注目しているか？

質問 11 回答集計結果：

表 54 質問 11 の回答人数・率

	国内ブランド(%)	国外ブランド(%)	どちらでもいい(%)
栄遷東里と航天北里	355 (44.2)	69 (8.6)	379 (47.2)
銀河広場	74 (35.4)	20 (9.6)	115 (55.0)
合計人数	429 (42.4)	89 (8.8)	494 (48.8)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者9人)

表 55 質問 11 の年齢別人数・率

	国内ブランド (%)	国外ブランド (%)	どちらでもいい (%)
30歳以下	81 (28.9)	44 (15.7)	155 (55.4)
31～40歳	76 (36.2)	17 (8.1)	117 (55.7)
41～50歳	108 (54.3)	13 (6.5)	78 (39.2)
51～60歳	83 (49.1)	11 (6.5)	75 (44.4)
61歳以上	76 (51.7)	3 (2.0)	68 (46.3)
合計人数	424 (42.2)	88 (8.8)	493 (49.1)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者16人)

表 56 質問 11 の性別人数・率

	国内ブランド (%)	国外ブランド (%)	どちらでもいい (%)
男性	203 (39.9)	63 (12.4)	243 (47.7)
女性	220 (44.4)	26 (5.3)	249 (50.3)
合計	423 (42.1)	89 (8.9)	492 (49.0)

出所) 2009年2月筆者作成 注：(この問題の未回答者17人)

表 57 質問 11 の学歴別人数・率

	国内ブランド (%)	国外ブランド (%)	どちらでもいい (%)
中学以下	118 (46.3)	15 (5.9)	122 (47.8)
高校	179 (45.8)	37 (9.5)	175 (44.8)
大学	123 (36.9)	34 (10.2)	176 (52.9)
大学院	8 (25.0)	3 (9.4)	21 (65.6)
合計	428 (42.3)	89 (8.8)	494 (48.9)

出所) 2009年2月筆者作成 注:(この問題の未回答者10人)

表 58 質問 11 の職業別人数・率

	国内ブランド (%)	国外ブランド (%)	どちらでもいい (%)
サラリーマン	126 (46.0)	18 (6.6)	130 (47.4)
管理職	52 (42.6)	20 (16.4)	50 (41.0)
幹部	36 (43.9)	7 (8.5)	39 (47.6)
教職	24 (38.7)	5 (8.1)	33 (53.2)
技術者	36 (44.4)	8 (9.9)	37 (45.7)
自営業	55 (39.9)	12 (8.7)	71 (51.4)
その他	95 (38.5)	19 (7.7)	133 (53.8)
合計	424 (42.1)	89 (8.8)	493 (49.0)

出所) 2009年2月筆者作成 注:(この問題の未回答者15人)

最後のこの質問は、主に天津市民の衣生活における“ブランド意識”に関する内容である。今回の調査で得た数字データは非常に興味深いものとなった。

今回のアンケートでは、ある明確な傾向が現れた(表54-表58)。それは、多くの人々が衣服を選択する際に“国外ブランド”ではなく、より“国内ブランド”を重要視しているということである。これまでメディアでは、“中国人は国外ブランドを好んでいる”という報道がされることが多かった。中には、国外ブランドを支持する者が30%を超えるといった統計などを挙げるものもあった。また、今回のこの質問については“どちらでもいい”の率がトータルで48.8%にのぼっており、国内ブランド・国外ブランドにこだわらない傾向も顕著に見て取れた。(表54)

年齢別(表55)では30歳以下の層で、国内ブランド28.9%、国外ブランド15.7%となったが、41歳以上の3つの年齢層では国内ブランドを優先する人の率が50%前後になっている。年齢が高い層に国内ブランドを支持する傾向が強く、61歳以上の層では、国外ブランドを優先する人はわずか3人とどまった。しかし、この年齢層においても“どちらでもいい”とする人の率が46.3%あり、高い年齢層の人であっても、色やデザイン、また価格等の要素で問題がなければ、国外ブランド製品を購入・着用する可能性があることを示した。

性別では、女性より男性の方が、わずかであるが外国ブランドを好む傾向が見られた。改革開放以来、服装の制限が緩やかになり、1980年以降少しずつ鮮やかな色彩、デザインの服装が増えていったが、そ

れはまず女性の服装に表れ、男性については人民服を着る人は急速に減少したものの、相変わらず素朴な色彩、デザインの服を身につけている傾向がしばらく続いていた。改革開放から30年になるとうとする今日においても、ファッションの分野では相変わらず女性が先行しているという印象が強かったので、このような結果はやや意外であった。

学歴別では中学、高校の層に国内ブランドを優先する傾向が見られるが、大学、大学院生で国内ブランドが少なかった分は、数字的にはそのまま“どちらでもいい”にまわっていて、国外ブランドへの傾斜というよりも、あまりブランドへの執着がないという印象を受ける。

職業別では、際立った特色は見られない。しいて言えば、管理職の人に“国外ブランド”を好む傾向が、他の職業層より多く見られることがあげられる。職業別では、どの職業層においても“どちらでもいい”と答えた人が40%を超えており、職業などにもこだわりなく、国内・国外のブランドをあまり意識しないという層が多く見られた。

ただし、大雑把に見て10人中5人が“どちらでもいい”としているが、残りの4人は“国内ブランド”を選択し、わずか1人だけが“国外ブランド”を選択するという比率は、私たち日本人の感覚とはずいぶん違うのではないだろうか。

日本においては、若い女性を含めて、ルイ・ヴィトンやシャネル、グッチといった外国ブランドを日常生活で使用するという傾向は見られる。また、そのブランドが国内か国外かにこだわらない層が多いことが予想され、それ以上の人が国内ブランドを重視するということはあまり考えられない。日本のデザイン、技術などは、決して国外のものと比較して劣るものでないであろうのに、日本においては、中国のような国内ブランドへのこだわりが感じられないのである。

このように中国の多くの人が“国内ブランド”にこだわりを持つ背景には、中国における1990年頃からの愛国主義教育、2001年以降の唐装の流行（筆者は、主に唐装の流行とその要因について考察した論文“唐装盛行的特点及歴史因素”を『民族服飾与文化遺産研究・中国民族学会2004年年会論文集』に発表した）、また紐釦や立て襟・伝統模様を現代衣服に取り入れるといった形で中華民族意識の高揚が挙げられるのではないか。改革開放以来の人々の意識と服装の変化については、別の機会にさらに詳細な考察を試みたいと思う。

III データの総合的分析

1 質問1～9の集計結果についての分析

20世紀以後の衣服文化と社会思想との関わりについて、天津市民はいったいどのように認識、理解しているのか。この問題に直接関連する内容は質問1から質問9である。下記の表59にあるように、人数比率総集計表から、明確にその傾向が見て取れる。このアンケートでは、20世紀のいくつかの時期において、その時々社会思想と人々の衣生活について、関係の有無を聞いているのであるが、その結果は、総平均比率において、“大いに関係がある”と“ある程度関係がある”を選択した人の合計は85.1%に達している。このことは、天津市民が「20世紀における中国人の衣生活と社会思想との間に関係がある」と考えていることについて、その認識・理解が非常に一般的であることを証明している。しかし、これ以外に、集計データから更に深く考えさせられる問題も現われている。これらの問題について、さらにほかの現地調査から得た情報を加えて、総合的に分析して、問題の解明につなげたい。

表 59 人数比率総集計表 (%)

	大いに関係がある	ある程度関係がある	関係がない	分からない
質問 1	41.5	49.7	4.3	4.4
質問 2	31.3	48.4	10.9	9.4
質問 3	37.1	49.2	7.5	6.2
質問 4	45.8	39.8	7.9	6.5
質問 5	37.1	40.4	16.3	6.2
質問 6	28.4	53.2	12.6	5.8
質問 7	53.5	39.1	4.0	3.4
質問 8	24.7	57.8	12.2	5.3
質問 9	48.1	40.8	7.9	3.2
総平均	38.6	46.5	9.3	5.6

出所) 2009 年 2 月筆者作成

表 60 質問 1-質問 9 までの最高・最低の人数比率集計表

	大いに関係がある (%)	ある程度関係がある (%)	関係がない (%)	分からない (%)
比率最高	質問 7 (53.5)	質問 8 (57.8)	質問 5 (16.3)	質問 2 (9.4)
比率最低	質問 8 (24.7)	質問 7 (39.1)	質問 7 (4.0)	質問 9 (3.2)

出所) 2009 年 2 月筆者作成

まず質問 1 から質問 9 までの人数比率総集計表 (表 59) の中にある四つの答案項目に対して、それぞれの問題の最高と最低の人数比率集計の結果を出して、表 60 のように示した。表 59 と表 60 を比較して、以下のいくつかの点に注意しなければならないと考える。

問題点 A : 質問 7 の比率集計結果について、
 “大いに関係がある”と“ある程度関係がある”の合計比率は質問 1 ~ 質問 9 までで最高の比率になっている。また、“関係がない”の比率は最下位となっている。

表 60 を見て分かるように、“大いに関係がある”を選択した人が最も多かったのは質問 7 である。さらに表 59 の質問 7 の“ある程度関係がある”とする集計結果と合計すると、その人数比率も 92.6% に達し、やはり 9 つの質問の中でトップにな

っている。一方、“関係がない”を選択した人は 9 つの問題の中で最下位になっている。それはなぜなのか。

質問 7 の内容は、主に改革開放後の 20 年あまりにおける人々の衣服の発展と社会思想との関係に対する認識・理解を問う内容である。関係があったことを肯定的に捉えたことのキーポイントとして、内容が「改革開放」期に関することであったことが挙げられる。つまり、調査対象者にとって時間的には最も近く、短期間のうちに変化が起こったために、彼らが明確に「関係あり」と選択したと考えられる。この時期の衣服の移り変わりについては、アンケート対象者が自ら体験してきたことであり、彼らからしてみれば、思想の開放がなければ、中国人の衣服に＜多様化、ファッション化、個性化＞といった流行は現れ得なかったということがはっきりしているのである。このような見方は、実は多くの調査対象者が

感じ取っていた。また筆者は中国人と交流している中で、多くの人が次のような考えを述べたのを耳にした。例えば、華菱制衣有限会社理事長兼総支配人何会民氏は次のようなことを話した。「文化大革命中は家で花を栽培することすら禁止された。修正主義の思想だと言われるからだ。衣服の場合は美意識を求めるため、なおさらであった。改革開放後、ひっくり返るような変化が起きた。食問題を解決されたことで、人々はようやく美意識を求めるようになった。個性を求めても、最も先駆的なファッションを求めても、取締りはもうなくなった」。

もし改革開放の二十年あまりの間に、依然として文革時期の社会思想の抑制が残っていたら、中国人の衣服にこのような変化はなかったであろう。この点については数多くの人が身にしみるほど感じていた。改革開放に至るまで、文化大革命を含め新中国は、左派と右派の権力闘争、政策の転換を繰り返した。文革が終わり、改革開放が唱えられても、人々はすぐには「改革開放」が不可逆的に進展するとは信じられず、社会の動向を警戒している様子があった。しかし、いったん開かれた堰はふさぐことは不可能であり、人々の活動は衣生活も含めて改革開放の流れに沿って発展した。質問7の人数比率集計結果は、この社会の現実を、調査対象者の多くが体験してきたものとして、如実に反映しているということが言えるのではないだろうか。そして、思想の解放が衣服の開放に結びつくかどうかについて、市民がこのような明確な結果を下したことの背景に、人々が改革開放後の思想の開放路線を歓迎し肯定して受け止めていることも反映していると考えられる。

問題点B：質問5について、“関係がない”の人数比率は最高位。“大いに関係がある”と“ある程度関係がある”の合計人数比率は最下位である。

人数比率集計の結果の中で、“関係がない”を選択した人数がもっとも高いのは、表60で示したとおり質問5であった。“関係がない”とした人の比率は全体の16.3%を占めた。“関係がない”とした人が最も少ない質問7に比べて12.3%も多く、4倍にも及んでいる。また、表59で示した“大いに関係がある”と“ある程度関係がある”の合計人数比率についても、やはり、他の8つの質問項目のそれぞれの合計と比べても一番低い77.5%となっている。最高位の質問7とくらべて、15.1%の差が生じている。これはいったいなぜなのか？

問題5の内容は、文化大革命のころに、多くの伝統衣服と洋服が中国（大陸）においてほぼ消失したことに、人々が自ら革命の立場を表したい、或は、批判的から自分の身の安全を守りたいという思いと、関係があるかどうかについての問題である。上記のような答案結果が得られたのは、おそらくこれらの調査対象者の、それぞれの人生経験と大いに関係があると思う。

表25で示したように、“関係がない”を選択した人の中で、40歳以下は全部で105人、全体の約64%を占め、同年齢層総人数490人の21.4%になる。一方、同じ“関係がない”を選択した41歳以上の人は全部で60人であり、この年齢層総人数519人の11.6%となっている。前述の40歳以下の比率より9.8%少ない。文化大革命が終結して30年余りが過ぎた今日、40歳以下の人については、新中国建設（1949年）から改革開放（1979年）までの30年間の衣服と社会思想に関わるさまざまな事柄について、自分の経験としてはほとんど無いに等しいということが考えられる。とすれば、彼らがこの質

問にどのように回答するかは、彼ら自身の文化大革命以前の服飾史や社会思想史についての学習程度によって決まるということになるであろう。

これと関連して質問4と質問6のいずれもがこの時期にかかわる質問である。表20、表30を見て分かるように、“関係がない”の回答を選択した人の中で40歳以下の比率は、明らかに41歳以上の人の比率より多い。例えば、質問4の場合では、40歳以下で“関係がない”の回答を選択した人数は53人で、同年齢層総人数488人の10.9%を占める、だが、41歳以上の場合では、同じ答えをしたのは27人、同年齢層総人数519人の5.2%である。したがって、これらの現象はやはり人生経歴の影響が大きいといえよう。

ただし、インタビューなどの調査の中で筆者は、改革開放前の30年間における左翼的なイデオロギーが中国社会に与えた危害について、人々の認識・理解が広く共通のものとしてあるということをししばしば感じさせられた。しかしながら、一方で、この種の左翼的なイデオロギーを成長させたその根底となる部分について、つまり人々が左翼的なイデオロギーを擁護した社会思想の部分については、前者と比べて、反省が欠けていたということが今回の調査で明らかになった。文化大革命期の衣服の表れについて言えば、多くの人々が、衣生活に現れた現象は自分たち自身の意識とも関係があると認識している。しかし、一部の人たちは、当時中国全体が老三色（グレー、紺、緑）と老三装（人民服、軍便服、学生服）の衣服に覆い尽くされたのは、まさに左翼的なイデオロギーおよびその思想の結果であり、一般人である自分たちの意識とは関係がないと感じている。実際、インタビュー調査の中で、筆者はこのような問題を投げ返す人に遭遇した。彼は「私が背広を着用したくても、彼らは着用を許してくれただろうか」と質問を返してきた。要す

るに、当時においては衣服を選ぶのは本人の意志とまったく関係がないことであったということである。しかし、これはまさに一種の自己防衛(自己保護)の意識であり、ただ、話す側が、これも「批判の対象になることを恐れる」という一種の意識の反映であることに気付いていないだけなのかもしれない。質問5で、“関係がない”を選択した人数が他の問題よりも多い結果になった、その原因はおそらくこのような要因があったことが考えられるのである。

問題点C：質問4、5、6はいずれも改革開放前の三十年間に関わる内容である。この時期は、右派と左派の対立から文化大革命へと、政治、社会思想が人民の生活に直接介入し影響を与えていたと考えられる時期であった。しかし、表59のアンケート集計結果を見ると、この三つの質問に対して「関係がない」を選択した人数の比率は平均すると12.3%にも達していた。この数字は確かにそれほど高くはないが、他の質問の回答と比較したとき、明らかに関係について否定的な印象を持つ人が多く存在していることを示しており、深く検討する必要があると思う。

さらに精細に集計表を見ると、質問1と質問7の結果が大変相似していることに気づく。問題1は民国時期に関する衣服の問題で、その時期の衣服に現れていた伝統要素や西洋要素が、当時社会思想が大変活発だったことと関係があるかどうかという質問であるが、データ結果では、「関係がない」と選択した人は非常に少なく、僅か4.3%である。新中国建国から改革開放までの30

年に関する質問4, 5, 6で、服装の変化と社会思想とのかかわりについて「関係がない」と認識する比率が上昇する一方、それをほさむ民国時代(質問1)と改革開放期(質問7)において「関係がない」と答える人の比率が減少するのは何故か。この問題について、筆者は以下のいくつかの状況と関わりがあるのではないかと考える。

1) 社会思想の意味に対して、誤解するところがある。

今回の調査を通して、ある一部の中国人は「社会思想と政治はまったく異なる領域のものだ」という見方を浮き彫りにした。

文化大革命を体験したある一人の天津市民は、質問4(改革開放前の新中国の衣生活[老三色, 老三装]の様相と社会思想との関わり)に対して「関係がない」を選択した。その人は、回答用紙の右上の片隅に一文を残した。その内容は「すべての服装はみな当時の政治のために奉仕した。文化大革命の頃に、緑の軍服を着用しないと、それで済むと思うの?もし今のように好き勝手に服を着ていたら、それはあなたが自分をつるし上げたいとしか思えないね。王光美氏に“ピンポンネックレス”を付けたのも全部政治から……」¹¹というものであった。この対象者が書き記した内容から考えると、おそらく彼の回答は「大いに関係がある」となるはずである。しかし、彼はわざわざ否定の回答である「関係がない」を選択したのである。それはどういうわけなのか。おそらく彼は、質問の中の「社会主導思想」と、当時の権威的イデオロギー、さらには権威によって推進された政治路線を区別したものであると思われる。あるいは「社会主導思想」を民間思想(民間の観念)、或は「草の根の意識」と理解していたのかもしれない。

2) 衣服における美意識への認識・理解には差がある。

インタビュー調査の中で、ある人は筆者に次のように言ってきた。それは「服飾の美しさを求めるということは、本当は社会思想とはまったく関係がないです。人が身なりを綺麗にできるかできないかは、お金によって決まるもの。お金の影響はきわめて重要です。改革開放の前に、身なりを美しくできなかったのは貧しかったから、美しくする経済的条件がなかったからです」という内容であった。この話をしたのは一人の女学生である。彼女がこのように話したのはそれなりの根拠がある。なぜならば、確かに、人はまず先に“生きる(衣食が満ち足りる)”という基本的な生存問題を解決してから、始めてその次の段階に属する“美意識”を求めるはずである。しかし、彼女はおそらく“美しく、綺麗にする”ことを求めることが許されない社会思想の下では、たとえ経済的条件があつたにしても、やはり身なりを“美しく、綺麗に”することはできない、ということへの理解が欠けているのである(上述した王光美氏のことは実に簡単な実例である)。アンケート調査の中においても、この大学生と同じような考え方を持って(社会思想と衣生活とのかかわりについて、「関係が無い」と答えて)いる人がいるということは、想定されることである。

中国は共産党一党独裁の国であり、また、当時は、社会全体が党の政策の下に強くコントロールされていた時代である。その指導は政治や経済だけでなく、人々の生活全般に及んでいた。第二次世界大戦中の日本において、たとえば「贅沢は敵だ」というスローガンの下、国民が日常生活のあらゆる面が政治(戦争遂行)のために制限されていた。これに照らして考えれば、改革開放前の中国も主導者の性質は違うものの、すべてにおいて集団の基準で人間を判断していたといえよう。衣生活において個人の自由意思で美意識を迫及するということは

到底認められることではなかった。当時、毛沢東の言葉として「中華儿女多奇志，不愛紅装愛武装」と表現されたように、その時代の特別な美意識とか「美しさ」の追求も見受けられた。しかし、「美しさ」の多様性が許されるかどうかは疑問視される。逆に「美しさ」の多様性を認めなかったかつての左翼イデオロギーは社会に貧困をもたらした。多様な“美”への追求が許されるのは、個人を尊重することであり、個人利益を尊重することにつながっている。これが社会思想の文明開化、現代化である。このような文明進歩あるいは現代的な社会思想の環境の下でない限り、社会経済が発展することは難しい。

3) “愛国”と“懐旧”などの社会心理と情感が存在している。

愛国心はいつの時代にも、どの国においても、多くの人々が持っている心理である。今日、日本においてもナショナリズム（愛国心、国粋主義）とパトリオティズム（愛国心、郷土愛）が対比され議論されたりもしているが、その際も「日本（民族、郷土）を愛する」ということが議論の前提になっている。また、アメリカにおける9.11同時多発テロの後のアフガニスタン空爆も、愛国心に後押しされてのものであった。また近くは、2008年北京オリンピック開会式で繰り広げられた（張芸謀演出の）アトラクションは、「中国」の愛国心を描いた壮大な絵巻であった。どの時代においても、その議論の話題が絶えないが、その「国を愛する」心理があまりにも強すぎると人々に一種のファナティックな情感を起こさせる。

中国人においても、愛国心は一般に存在している一種の素朴な心理である。確かにこれは尊重する価値がある。今回の調査を通して筆者は、一部の回答者に、この種の心理があまりにも偏っていて、そして、政治的警戒心があまりにも強い人があることを感じた。

筆者は聞き取り調査の中で、1949年以降の中国服装のデザインや色合い、紋様などが単調で膠着した状況であったことを指摘し、またそれを国家や社会思想と関係付けることがあった。そのような時、一部の調査対象者はすぐに硬い表情した。彼らにして見れば、まるで国家や社会主義のイメージが損なわれるかのような気がしたのであろう。

アンケート調査においても、質問項目に台湾や香港、海外華僑の世界における“個人を尊重する”や“個性を尊重する”、“伝統文化を尊重する”といった傾向に触れている。加えて、筆者が外国籍であることを知った途端に、一部の対象者はすぐに警戒を始め、あるアンケート回答者は筆者に「あなたたちは偏見を持ってはいけない。実は、1949年解放以後の私たちの服装もとても綺麗だ。あなたたちが想像しているようなものではない。文化大革命の時、人々は軍服を好んで着ていたが、それは軍服そのものが本当に綺麗だったからだ。みんなこのように考えていて、特に何かわけがあるわけではない。」と言った。このように話をしてきた人は、ただ単に文化大革命時期の軍服そのものの美しさを擁護しているだけではないのであって、それは明らかに国を愛する心の現われでもあるはずである。彼のような人たちは当然、質問4、質問5、質問6の、主に文化大革命頃の衣服と社会思想との関わりについての質問に対して、おそらく「関係がない」を選択したことが考えられるのである。

そのほか、今日の中国社会においては、一種の毛沢東時代への懐旧の思いが漂っているという現象がある。要するに、これはいわゆる「懐旧の情緒」である。その発生の要因はさまざまだが、本研究の内容に属していないので、述べないことにする。しかし、この「懐旧の情緒」は今回のアンケート調査結果にまったく影響がなかったとは言えないと考える。

以上で述べた三つの状況から、改革前の服装の変化と社会思想との関係の質問に対して、「関係がない」を選択した人の比率が、民国時代のほぼ類似した内容の質問と比べて8%も高いという結果が得られた理由が考えられる。

問題点D：質問2について、その質問内容は主に中山服と三民主義との関係についてである。アンケート結果を分析する前に、ここでまず中山服の経緯について簡単に紹介したい。

中山服は孫文（孫中山）が率先してそれを着用したことから名付けられたという。民国18年に国民党の憲法が制定された。文官が任命の宣言をする際には、一律に中山服を着用すると決められたが、それによって孫文を尊ぶことを示すのである。その形は九つボタンに大きな襷のついたポケットだった。その後、『易経』や周代の儀礼などに基づいて寓意を施し、例えば、国の思惟（礼、儀、廉、恥）に基づいて、前身頃には四つのポケットをつけると決められた。また国民党は、西洋の国々の三権分立と区別する為の五権分立（行政、立法、司法、試験、監査）を提唱し、それに基づいて前身頃に五つのボタン、三民主義（民族、民権、民生）に基づいて袖口に必ず三つのボタンをつけることを決めた。このように、西洋の服装の基本形の上に、中国の伝統意識を染み込ませている¹²のが中山服である。新中国の時期に入っても、依然として政権リーダー毛沢東に好まれ、率先して着用されたが、国民党政権に

よって与えられたその文化的意味は、その後ほとんど取り上げられることはなかった。以上、簡単に中山服の経緯を紹介したが、これのこを踏まえて分析に臨みたいと思う。

表59のデータ結果を見ると、質問2について、「関係がない」を選んだ人の比率は10.9パーセントと多い順で4位であるが、「分からない」を含めた人数比率は20.3%に達しており、比率は質問5について2番目に高くなる。中山服は今も中国人によく知られている衣服であるにもかかわらず、なぜこのような結果になったのか、検討を加える必要があると思う。このアンケート結果から、少なくとも2割の人は、中山服の製作やその形式に含まれている基本的な意味について理解していないということがうかがえる。中山服は中国でその知名度が高く、いまだに国家リーダーたちにとっては必ず備えなければならない正装のひとつである。調査の中で、筆者はこの服について多くの人に直接尋ねてみた。その結果、一般人はたいていこの服が、孫文と関係があることを知っているものの、さらにその経緯などについて深く掘り下げて聞いてみると、案外知らない人が多かった。また、さらに一部の人は三民主義が何かということについてもあまり分かっていない。このことの原因として、現在、台湾が中国（大陸部）とは対立的な立場であるため、毛沢東が大変好んでよく着用した中山服が、三民主義と関係があるということになかなか結びつかない、ということが考えられる。政治の対立と遮断から、長い間、中国大陸では孫文の三民主義を教育・宣伝してこなかったため、詳しく知らない市民が多いのも仕方のないことかも知れない。

以上、いくつかの点で、アンケートに表れた数字だけでは即断できないいくつかの

点に触れた。しかし、今回このアンケート調査の質問1から質問9までの集計結果から、第一に、天津において、「20世紀以来の中国衣服は社会思想と関係がある」と認識・理解している人が全体の約8割を占めているということ、第二に、約4割の人たちは明確に二者の関係が「大いにある」と考えているということ、以上の二点が確認できた。

この結果から以下のことが導かれる。すなわち、天津市民の多くは衣生活をただの物質生活であると見做していない。そして、衣服が持つ精神機能の面に関しての理解は、かなり高いレベルに達しているということが言える。このような衣生活の捉え方（認識・理解）は、実は筆者が天津周辺の東部地域で考察したときにも感じていたことである。つまり、衣生活に対するこの種の認識・理解は、現在の中国ではかなり一般的になっていると考えられる。

2 質問10、質問11の集計結果についての分析

このアンケート調査の最後の2問については、主に中国人の服飾観念（思想）における自己意識と、ブランド意識をめぐる内容である。現在の中国の服飾文化は、概ねファッション化、個性化、ブランド志向化に向かって発展しつつある。この観念は、多くの服飾に関連する学者たちにも指摘されてきた。しかしながら、中国人の衣生活が最終的にこの境地に辿りつくつかないかは、服飾研究者の判断によって決められるものではない。それはむしろ、現実の衣生活を実践している一般の人々の、自らの服飾観念の中にある自己意識やブランド意識の変化、発展のレベルによって決められるといえよう。

質問10の内容は、衣服を選ぶ際に、主に自分の意志で決めるのか、あるいは他人の意識によって決めるか、という内容であった。表49の回答集計結果を見ると、調

査対象者のうち9割以上(91.1%)の人は、自分の好みを基準として自分たちの衣服を選んでいることが分かった。つまり、天津市においては、既に衣服に対して、「個性を求める」といった社会心理が、一般的に人々の衣生活に根付いているということがいえよう。改革開放以前の30年間において、中国大陸ではずっと階級闘争を中心とする政治路線を推進していた。人々の衣食住などの生活は階級の色彩に染められることを余儀なくされた。個性を表すことは批判の対象と見なされ、「古臭い、ブルジョア、修正主義」のレッテルが貼られた。個性を抑制できない人は、その人の「階級意識が高くない」、「政治意識が堅固ではない」と批判されたのである。さらに、「自己」を基準にして自分たちの生活を組み立て、進めるとなれば、さらに「腐朽」「立ち遅れ」また「道理にそむいている」などとさらに批判されたのである。

改革開放(1979年)からすでに30年が過ぎようとしている。思想を解放する運動は、人々の自己意識をすくいに活発化させた。個人の衣生活の領域において、人々はますます自己表現や個性を重要視するようになった。今回、天津市民に行ったアンケート調査を通して、市民における衣服に対する意識は「自己重視、個性重視」という方向で、既に高いレベルに至っていることを見出すことができた。これは、中国の社会思想観念に大きな変化が起きたことの表れであり、改革開放以来の中国服飾文化が加速的に近代化に向かって進んでいることの重要な社会要因の一つでもある。

質問11について、ブランド化(商標)は、衣生活が近代化したことの一つのシンボリックな表れである。留学期間、実際に筆者が接した中国人の中に、ブランドの衣服を身につけた人が少なからずいた。かつて、多くの人に同じような質問をしたことがある。「あなたはブランドの衣服が好きですか?」と。得られた回答で、それを否定す

るものは一人として現れなかった。それ故、今回アンケートの質問を設定をするにあたって、この質問をあえて設けないことにした。つまり、多くの人にして見れば、これは非常に当たり前の問題であり、愚かな質問と思われると考えたからだ。明らかに、今の中国人の多くはブランドの衣服が好きであると言えよう。しかし、今回の質問の中心は、国外と国内のブランドを比較した場合、どちらをより好むかということである。この意識は、中国におけるブランド服飾市場とブランド服飾の経済発展にまで影響を及ぼすだけでなく、衣生活におけるブランドの文化的価値（信念・態度）にまで影響を与えることになるのである。したがってここに表れる傾向と分析は、注目し得る価値があると思う。

アンケートの回答集計結果の表54によると、ブランドの衣服を選ぶ場合、約4割以上の人が国内のブランドを選ぶことが望ましいと考えている（42.4%）。一方、明確に外国ブランドを選択することが望ましいと考える人は、1割に満たなかった（8.8%）。つまり、これは、天津市民のブランド意識において、民族文化的価値の意識が相当際立っているということを示している。

また、国内ブランドを選択した人の集計結果だけを見ると、表55に示したように、41歳以上の人の比率が比較的高いことがわかる。要するに、41歳以上の年齢の人たちにおいては、衣服を選択する場合に、民族意識がより強く現れているということである。

そして、「どちらでもかまわない」を選択した人は、ほぼ全体の5割近くを占めた（48.8%）。すなわち、外国ブランドの衣服であれ、国内ブランドであれ、自分が好んでいるのであれば、どちらでもかまわないという人たちである。このデータ集計結果から、かれらが衣服を選ぶ時に、どのブランドにするかという問題については、主に「個人」の嗜好、「自己」の基準によって決

めるという人が半数を占めるということがわかるのである。30歳以下、31歳～40歳以下の2グループでは、共に「どちらでもかまわない」が回答の最多となり、それぞれ全体の約55パーセントを占めている。また、この2グループを比較すると、「どちらでもかまわない」の比率はほぼ同じであるのに、「外国ブランド」を選ぶものは、31歳～40歳以下が8.1パーセントであるのに対して、30歳以下のグループは15.7パーセントと、明らかな違いを見せている。「どちらでもかまわない」の人々をあわせて考えたとき、30歳以下の人々において、「外国ブランド」を避けるという意識が希薄になっていることが明らかに見て取れる。この先数年、さらに十数年が過ぎた時には、外国ブランドを選択する人がさらに増大するであろうことが予想されるのである。

今回、筆者がこの現地調査を通して得た結果においては、天津市における市民の衣服に対する考え方の中で、「自己意識」と「ブランド意識」の程度がかなり高いということがいえる。天津市は北京の周辺都市として、中国東部地域の都市の中で代表的な都市であり、経済的にも文化的にも新しいものが次々と入り込んでいる。その一方で、北京から多少の距離を置いていることで、古いものが生活のさまざまな面に残っている街でもある。このような天津市における、一般市民の衣服に対する捉え方は、やはり中国人の一般的な意識を代表しているものとして、意味を持っていると考えられる。

しかし、ここで疎かにしてはならないのは、中国の国家全体の衣服消費レベルは、まだアンバランスな状態に置かれているということである。改革開放から30年近くが過ぎようとしているが、地理的な条件などから、都市部と農村の経済格差は相変わらず大きいし、また、都市部の開発がすすめばすすむほど、農村との格差は逆に広がっているといえよう。経済特別区の計画的

な開発、沿海地域の発展は目覚ましいものがあり、その格差は、単に産業・経済にとどまらず、人々の衣食住、文化などあらゆる面での格差につながっている。このような状況下で、人々の衣服消費レベルや教育レベルの格差も、当然大きいものがある。したがって、中国社会全体において、衣服生活の面で真にファッション化、個性化、ブランド化といった近代的な段階に入るには、また相当な道のりが必要であるといえよう。

おわりに

筆者が今回行ったアンケート調査は、対象者1,021名という小規模なものであったが、20世紀中国衣生活の変遷と社会思想との関わりについての、天津市民における認識・理解の一面を明らかにすることができたと思う。今回得られた天津市民のデータは、20世紀100年間における衣生活の移り変わりは、その背景にさまざまな要因がある中で、20世紀中国における社会思想の変化と密接な関係があるということを実に反映していた。しかし、一つ一つの歴史の発展時期における二者の関係に対する認識・理解には必ずしも一致しない部分がある。このような結果が生じた理由について、

1. 改革開放以後の衣生活について、社会思想と「大いに関係があった」と選択した人が、いくつかの時期の中で、最も多かった。その理由として考えられるのは、主に、時代的につい最近のことで、対象者のほとんどがこの期間の衣生活を直接体験しており、より関わりが理解され易かったことが挙げられる
2. 文化大革命期、一部の伝統衣服と西洋衣服が社会から姿を消した。それは民衆が革命の立場を表す為、または批判を恐れて着用を拒んでいたという、民衆の側の意識と関係があるということについては、「関係がない」と選択肢した人が、いくつかの質問項目の中で最も多かった。

しかも、低年齢層になるにつれてこの比率が高かった。この結果から、文化大革命期の左翼イデオロギーが衣生活に引き起こした異様な変化については一般に認識されているが、その思想の土台となった民衆の左翼イデオロギーを“賛美し、崇拝する”考え方があったこと、さらに、批判の対象から“自分を保護する”という自己防衛の考え方も一種の社会意識であるということについて、理解に欠けているところがあった。この二つは、新中国建国から文化大革命期における人生体験の少ない人、或はまったくない低年齢層にとっては、十分に認識・理解することが難しかったものと考えられる。

3. 集計結果では、新中国建国から文化大革命までの衣生活と社会思想との関係については、民国時代のそれと比較して、前者の方が“関係がない”と選択肢する比率が8%も高い。より古い時代の事柄のほうに「関係がない」とする人が少なかったことについて、

一つは、社会思想の言葉の意味そのものが十分に理解されていない可能性がある。

二つは、衣服における人々の美意識についての理解に相違が生じている可能性がある。

三つは、国を愛する気持ちや毛沢東時代を懐旧する心理が生まれた可能性がある。

などの理由が考えられる。

4. 中山服と三民主義との関係については、“関係がない”と“分からない”とを合わせると20.3%という比較的高い率の結果が出た。中国大陸の共産党政権下で、中山服は依然人々に親しまれ着用されたが、その衣服に含まれている国民党によって作り出された三民主義の文化的意味に対しては、あまり理解されていない面がある。台湾と対立状態にある中国では長い間、孫文及びその三民主義について

の情報があったことと関係があると考えられる。

そして、今回得られた質問10、質問11の集計結果を通じて、今日の中国人が衣服を選択する際には、主に個人の意識、自分の好みを基準として選んでいるということが裏付けられた。衣服を選ぶ（購入する）際の判断基準について、以前のような社会主体意識から、自己主体意識へと変わり、個性をアピールする考え方が現れているという結果が、調査によって明らかになった。そして、衣服を選択するに当たって、国内ブランドにするか、或は国外ブランドにするかについては、4割あまりの人が国内ブランドを好んでいるという結果から、今も人々は自分たちの文化的価値を重視しているということが覗えた。そして、年齢層が上に行くほど、その傾向はより強く見られた。一方、約5割近い人は“どちらでもかまわない”と答えた。この結果から、経済的条件を考慮した上で、現在の中国人は、自分たちが気に入る衣服であれば、ブランドについては国内、外国にかかわり無く、それを手に入れたいと考えている人が増えていると見ることができる。

以上、20世紀の中国都市における服飾に関する認識について、主に天津の事例を中心に考察を行なった。本稿で問題にしてきた中国における都市市民の衣生活と社会思想との関係についての認識・理解や、それにまつわる人々の衣生活の態度というテーマについては、今後も不特定多数から抽出された話者からの聞き取り調査やインタビュー調査を充実させることにより、また、歴史文献資料を更に精査考察していきたい。それらを通じて更に、二者の間の密接な関係の全体像と、今後の中国庶民の衣生活への態度を解明していきたいと考えている。

¹ 2006年度、筆者は愛知大学大学院中国研究科のデュアルディグリー・コースの学生として南開大学政府学院社会学研究科に一年間留学した。留学の間、天津および周辺地域（北京など）において、聞き取りやアンケートなどの現地調査を実施した。本稿は2006年度愛知大学ICCS若手研究補助金によって行われた調査研究の報告書である。

² 例えば、山内智慧美の『20世紀漢族服飾文化研究』や、謝黎の『チャイナドレスをまとった女性たち』、劉志琴の『近代中国社会文化変遷録』などが挙げられる。

³ 『天津市地図冊』中国地図出版社編制出版発行、2005年。

⁴ 『天津市』編集委員会編『中華人民共和國地名詞典』商務印書館出版、1994年、p3-p9。

⁵ 周俊旗（主編）『民国天津社会生活史』天津社会科学院出版社、2004年、引用。

⁶ 劉錦藻の『清朝統文献通考』（二）に「欧風東漸翩翩少年多有易装以炫者（欧米風習は中国に入り、洋服をひけらかす若者も少なくない）」とある。天津だけでなく、当時、外国文化の影響を受けた各植民地でよく見られた光景であることがうかがわれる。参照劉錦藻『清朝統文献通考』（二）、商務印書館、1937年。

⁷ 本調査は愛知大学大学院周星教授と中国南開大学大学院王処輝教授のご指導の下で実施した。南開大学で留学している間、王先生からこのアンケート調査実施をめぐってたくさんアドバイスを頂きました。豊富な調査経験と知識を伝授して下さっただけではなく、質問事項の設定にも厳しい指導をしてくれました。また私に実施調査の場所、時間、方法や外国籍の人における現地調査での注意事項などのことについて助言してくださった。さらに、補助調査員も紹介してくれました。今回、筆者とともに五名の補助調査員はいずれも南開大学の学生で、それぞれの名は康艶、涂炯、蘇静思、陳萍、張研。大学院生の張さんを除いてあとの四名はみな社会学科の学部生である。調査開始から資料データ回収するまでの間、彼らはずっと協力してくれました。特に8月の酷暑の中の調査、大変苦勞なさいました。この場をお借りして、お二人の先生方と補助員の五名の学生に真摯な感謝の意を申し上げます。

⁸ この区域の名称は都市建設を応じて“榮遷東里”へ移して来た人たちだったために、そのゆえに“光榮拆遷（移してきたことは光榮である）”という意味を込めて、この区域を“榮遷東里”と名づけられたそうだ（居民委員会の責任者の話）。

⁹ この調査では、調査対象者を決めるのに厳格な抽出形式を採用せず、指定の住民区域と公共空間で随時アンケートを配布する方法を採用した。これは主に、調査実施者が外国人である場合は、実際に調査に当たって多くの困難が直面しているというのが理由だった。参照高橋五郎『国際社会調査』、東京：農林統計協会出版、2007年、p 90—p 100, p 103—p 108。

¹⁰ 指導教授から、この課題の普遍性を追求するためには、特に天津という対象地域から考えて、アンケート調査においては、ある一定量数のデータを入手しなければ論点を立証する柱とするのには弱いと指摘いただいた。

¹¹ 劉少奇と夫人王光美が二人でインドネシアを公式訪問した際、王光美がきらびやかな夏の衣装（チャイナドレス）を着用し、先のとがった靴を履いていたため、1967年1月、清華大学で造反派によって無理やり首にピンポンで作ったネックレスをかけられ、罪状についての審問を受けた。インドネシア訪問時に着ていた衣装はブルジョア階級のものとして批判され、反革命と認定された。

¹² 華梅、施潔民訳『中国服飾史』（五千年の歴史を検証する）、白帝社、2003年、P193。

参照文献

- 山内智慧美『20世紀漢族服飾文化研究』、西安：西北大学出版社、2001年。
- 謝黎『チャイナドレスをまとう女性たち』（旗袍に見る中国の近・現代）、東京：青弓社、2004年。
- 劉志琴『近代中国社会文化変遷録』、杭州：浙江人民出版社、1998年。
- 『天津市地図冊』中国地図出版社編制出版、2005年。
- 『天津市』編集委員会（編）『中華人民共和國地名詞典』、商務印書館出版、1994年、p 3—p 9。
- 周俊旗（編）『民国天津社会生活史』天津社会科学院出版社、2004年、引言。
- 劉錦藻『清朝続文献通考』（二）商務印書館版、1937年。

高橋五郎『国際社会調査』、東京：農林統計協会出版、2007年、p 90—p 100, p 103—p 108。

華梅、施潔民（訳）『中国服飾史』（五千年の歴史を検証する）、白帝社、2003年、p 193。

周星（主編）『民俗学的歴史、理論与方法』、北京：商務印書館、2006年。

今明（主編）『津沽旧影老照片』、天津：天津社会科学院出版社、1998年。

来信夏（主編）『天津近代史』、天津：南開大学出版社、1987年。

林希『老天津』（津門旧事）、南京：江蘇美術出版社、1998年。

天津社会科学歴史研究所編写組（編）『天津簡史』、天津：天津人民出版社、1987年。

天津市文化局文化史志編修委員会（編）『天津文化簡志稿』、天津：天津文化局文化史志辦公室出版、1988年。

天津市档案馆編輯『北洋軍閥档案史料選編』、天津：天津市戸古籍出版、1990年。

薛君度、劉志琴（編）『近代中国社会生活与觀念変遷』、北京：中国社会科学出版社、2001年。

佐藤郁哉『フィールドワーク 一書を持って街へ出よう』、東京：新曜社、1992年。